

Title	明治前動物渡来年表
Sub Title	Exotic Animals Brought in Japan: A Chronology to 1868
Author	磯野, 直秀 (Isono, Naohide)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 自然科学 (The Hiyoshi review of natural science). No.41 (2007. 3) ,p.35- 66
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10079809-20070331-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

明治前動物渡来年表

磯野直秀

Exotic Animals Brought in Japan: A Chronology to 1868

Naohide ISONO

私たちの身边を見回すと、ふだんは意識していないものの、外来の動物、すなわち本来は日本列島に生息しておらず、海外から渡来した種類が数多く存在する。そのなかには飼育しているものも、野生化しているものもある。いま少し細かく区分してみると――

飼育している種類

- ①食用・使役用：イヌ・ウマ・ウシ・ブタ・ヒツジ・ヤギ・ニワトリ・アヒル・ガチョウ・シチメンチョウなど。
- ②愛玩用・動物園の動物：イヌ・ネコ・ゾウ・ラクダ・トラ・パンダ・クジャク・オナガキジ・オウム・インコ・カナリア・ブンチョウ・ベニスズメ・ワニ・キンギョ・熱帯魚など。

野生化している種類

- ③狩や漁、鑑賞，その他の目的で放ったもの：マングース・コウライキジ・コジュケイ・カササギ・シラコバト・カダヤシ・ブラックバス・ヨウシュミツバチなど。
- ④飼育動物（①②）の脱出・放棄：イヌ・ネコ・ヤギ・ハクビシン・アライグマ・タイワンリス・インコ・ブンチョウ・ミドリガメ・ウシガエル・ティラピア・アメリカザリガニなど。
- ⑤船舶に潜入，樹木・農作物に付着，風が運ぶ，漂着するなどにより侵入：クマネズミ・ドブネズミ・ジャコウネズミ・モンシロチョウ・クロゴキブリ・アオマツムシなど。

これらの種類がいつ頃日本に渡ってきたかを明らかにすることは博物誌や文化史の大きな課題の一つであり，すでに先人の方々が『日本博物学年表』（白井1934）や『年表日本博物学史』（上野1989）などに事例を挙げておられるが，室町時代・江戸時代の鳥獣渡来に関する資料が

〒 232-0066 横浜市南区六ツ川 3-76-3-D210, 慶應義塾大学名誉教授。(76-3-D210, 3-chome, Mutsukawa, Minami-ku, Yokohama 232-0066, Japan; Professor Emeritus, Keio Univ.) [Received Jul. 31, 2006]

十分に調べられていない頃で、事例も限られていた。

じつは慶應義塾図書館に『唐蘭船持渡鳥獸之図』という重要資料——江戸時代に長崎に渡来した多くの鳥獸を描いた図録——が前々から所蔵されていたが、その存在さえ一般には知られておらず、内容もまったく調べられていなかった。幸運にも私は偶然にその資料と出会って、詳細に検討する機会に恵まれ、さらに国会図書館や東京国立博物館などに同種の資料があることを知って、それらの資料も調査することができた(磯野・内田1990, 1991, 1992)。

前述のように全般的な年表には渡来動物の記事が載せられているが、渡来動物だけをまとめた年表はまだ作成されていなかった。そこで、既出の記事に『唐蘭船持渡鳥獸之図』などで得られた知見を加え、「明治前鳥獸渡来年表」と題して本誌にまとめた(磯野1993)。

その後、ふたたび偶然に狩野常信画『鳥写生図巻』(東京国立博物館蔵)の存在を知り、また室町時代から江戸時代にかけての日誌類を調べて、それらにも渡来鳥獸の記録がいろいろと含まれていることがわかった(磯野2003, 2006)。このような次第で「明治前鳥獸渡来年表」も大改訂が必要となり、新知見のほかに鳥獸以外の動物も含め、記文も改めて本稿を作成した。取り上げたのは前記①②に該当する例が大半を占めるが、③～⑤についても多少の事例を含む。なお、④⑤については、「珍禽異獸奇魚の古記録」(磯野2005)も参照していただきたい。

凡例

- 1 年表には、推古天皇時代から明治元年(1868)までを収録し、有史以前に渡来した犬・馬・牛などは略した。一方、琉球の動物、侵入種、一部の剥製品を含めた。
- 2 紙面の制約から、種の特徴や原産地は記さず、藩主・蘭館長・清商などの人名も多くは省いた。単に「献上」とあるのは、朝廷や幕府、將軍などへの献上である。
- 3 月日：5・15のように示し、閏月は①②……とした。月日不明の項は年の最後に、「寛政年間」などの項は該当期間の最終年に置いた。7・11 / 7・15と連記したのは、蘭船2隻が別々に入港し、どちらに持ち渡り品が搭載されていたか不明の場合である。
- 4 品名：事項の記載では、なるべく原記載の漢名・漢字名を用いた。原記載が仮名のときは「 」を付した。インコについては多様な表記があるので、音呼^{インコ}以外は「インコ」とした。「下鴨^{アヒル}」など下線付きの片仮名は、原記載に記されている読み。前記以外の片仮名表記は現和名である。「ラクダ」など波線を付した場合はその種類の初見であることを示す(確実な同定に限る)。また、資料の探索には『資料日本動物史』を、種類の同定には『日本鳥名由来辞典』および『江戸鳥類大図鑑』を、適宜参照した。
- 5 用語・記号：往時の語「唐鳥」は外国産の鳥、同じく「類違……」は同類だが形態がやや異なることを示す。「通航一覧245」は『通航一覧』巻245の意味、(?)は、同定できない場合、引用文中の[]は磯野による注あるいは補足である。
- 6 稿末に、「初出索引」を付した。

和暦	西暦	月日・事項 (出典)
推古6	598	●4月, 新羅より鶺鴒(カササギ) 2羽を, ^{なにわのきしの いわかね} 難波吉士磐金が持ち帰る(書紀)。 ●8・1, 新羅, 孔雀 1羽を献上(書紀)。[注1]
推古7	599	●9・1, 百済, 駱駝(ラクダ) 1・驢(ロバ) 1・羊2・白雉1を献上する(書紀)。ラクダはアジア原産のフトコブラクダの可能性が大だが, アフリカ原産のヒトコブラクダの可能性も残る。→618, 657, 679 [注2]
推古26	618	●8・1, 高句麗, 駱駝1を献上(書紀)。
大化3	647	●12月, 新羅, 孔雀1・鸚鵡(オウム) 1を献上(書紀)。[注3]
斉明2	656	●百済より, 西海使(遣百済使)が鸚鵡1を持ち帰る(書紀)。
斉明3	657	●百済より, 西海使が駱駝1・驢(ロバ) 2を持ち帰る(書紀)。
天智10	671	●6月, 新羅, 水生1・山鶏(?)を献上(書紀)。
天武8	679	●10・17, 新羅, 馬・狗・騾(ラバ)・駱駝を献上(書紀)。
天武14	685	●5・26, 新羅, 馬2・犬3・鸚鵡2・鶺鴒(カササギ) 2を献上(書紀)。
朱鳥1	686	●4・19, 新羅, 馬1・騾(ラバ) 1・犬2を献上(書紀)。
文武4	700	●10・19, 新羅より, 佐伯宿禰麻呂が孔雀を持ち帰る(続日本紀)。
養老3	719	●⑦・7, 新羅, 騾(ラバ) 牡牝を献上(続日本紀)。
天平4	732	●5・19, 新羅, 鸚鵡1・鶺鴒(カササギ) 1・蜀狗(?) 1・獵狗1・驢(ロバ) 2・騾(ラバ) 2を献上(続日本紀)。
天平17	745	●4・16, 本日付の正倉院文書「園池司解」に「孔雀一羽日料, 米二合五勺」とあり, 天皇の庭園でクジャクが飼育されていたとわかる。
弘仁9	818	●1・13, 新羅が驢(ロバ) 4頭を献じたこと, 太宰府が通知(日本紀略)。
弘仁11	820	●5・4, 新羅, 羖羝羊(多毛のヒツジ) 2・白羊4・山羊1・鷲(ガチョウ) 2を献上(日本紀略)。
天長1	824	●4・17, 渤海国, 契丹大狗2・獐子(チン) 2を献上(日本紀略)。
承和14	847	●9・18, 入唐僧の慧雲が, 孔雀1・鸚鵡3・狗3を献上(続日本後紀)。
寛平1	889	●2・6, 『宇多天皇御記』本日条に「大宰小式が献じた獐」の記事がある。
延喜3	903	●10・20, 唐人, 羊と白鷺を献上(日本紀略)。『扶桑略記』では11・20。
延喜9	909	●11・27, 大宰府が孔雀を献上(日本紀略)。
延喜19	919	●7・16, 唐商, 孔雀を献上(日本紀略)。
承平4	934	●7・17, 薩摩国, 唐馬を献上(日本紀略)。
承平5	935	●9月, 唐商, 羊数頭を献上(日本紀略)。
天慶1	938	●7・21, 大宰府, 唐商献上の羊2頭を進上(本朝世紀)。
長徳2	996	●⑦・19, 宋人, 鷲鳥と羊を献上(日本紀略)。
長和4	1015	●2・12, 大宰大監藤原蔵規が鷲鳥2・孔雀1を進上する(日本紀略)。
承暦1	1077	●2・28, 宋商が羊2頭を献上(扶桑略記)。『水左記』はヤギとする。

- 永保2 1082 ●8・8, 宋商が献上した鸚鵡を白河天皇が見る(百練抄)。
- 久安3 1147 ●11・10, 摂政藤原忠通、西海の荘園から贈られた孔雀と鸚鵡を, 鳥羽法皇に献上(台記)。
- 久安4 1148 ●3・27, 仁和寺宮, 杵島荘から贈られた孔雀を崇徳上皇に献上(史料綜覧)。
- 承安1 1171 ●7・26, 平清盛が羊5頭と麝1頭を後白河院の御所に連れてくる(百練抄)。「麝」がジャコウジカか, ジャコウネコかは不明。→1226, 1281
- 嘉禄2 1226 ●2・7, 藤原定家が「生麝」を見て「猫に似たり」と記す。おそらくジャコウネコ(明月記)。
- 弘安4 1281 ●この頃成稿の『塵袋』に, 「麝香ハ鹿ノタグヒト覚ルヲ, 度々日本へ渡シタルハ, ミナ, ネコノ姿」とあり, ジャコウネコが何回か渡来していた。
- 応永15 1408 ●6・22, 若狭国わかさに南蛮船が到着, 象(インドゾウ)1・山馬(?)1・鸚鵡2対・孔雀2対を献上(後鑑)。応永18年, 幕府は象を朝鮮国王に贈呈(李朝実録)。
- 応永23 1416 ●5・22, 伏見宮貞成親王, 羊を初めて見る(看聞御記)。
- 応永29 1422 ●4・17, 禁裏が室町幕府から孔雀を借り出し, 19日に返却(兼宣公記)。
- 享徳3 1454 ●本年成稿の辞書『撮壤集』に「白鵬ハツカン」の語があり, ハツカンがすでに渡来していたことを示唆する。
- 文明4 1472 ●9・23, 大内教弘が明から取り寄せた水牛2頭のうち, 1頭が上洛(後鑑)。
- 文明9 1477 ●11・17, 禁裏に水牛1頭が連れてこられ, 後土御門天皇が見る(お湯殿)。
- 明応5 1496 ●5・3, 本日付の識語をもつ辞書『明応5年本節用集』に, 「八々鳥ハハツチヤウ」(ハツカチョウ)が収録されている。→732
- 文亀1 1501 ●16世紀初頭に完成したとされる辞書, 通称『文明本節用集』は「音呼インコ」「下鴨アヒル」「家猪ブタ」を収録。インコ・アヒル・ブタの初見。
- 文亀2 1502 ●1・20, 本日, 明より堺に金魚が持ち渡られたと『金魚養玩草』は記すが, それを裏付ける同時代資料は発見されていない。→1616
- 天文7 1538 ●5・3, にながわちかのぶ 蜷川親順, 細川氏に嶋鶉を献上する(親俊日記)。幕末まで「嶋鶉」(シマヒヨドリ)の名が使われたが, 現種名はクロヒヨドリ。[注4]
●6・13, 江州山徒が將軍足利義晴に嶋鶉を献じる(親俊日記)。6・20, 將軍はそれを禁裏に献上(お湯殿)。
- 天文19 1550 ●7・29, 『多聞院日記』に「キンケキ」という鳥を見たとの記事。「錦鶉」(キンケイ, 金鶉とも)の初見。
- 天正3 1575 ●明船が豊後白杵うすきに到来し, 大友宗麟に象1・虎4・鸚鵡などを贈る(長崎略史)。[注5]
- 天正14 1586 ●6・23, 山科言経, 大坂城で飼われていた孔雀を見る(言経卿記)。
- 天正17 1589 ●3・29, 豊臣秀吉, 見事な孔雀を禁裏に贈る(お湯殿)。
- 天正19 1591 ●①・8, 帰国した遣欧少年使節が秀吉にアラビア馬1頭を献上(岩生1980)。

- 文禄3 1594 ●7月, 堺の商人納屋助左衛門, ルソンで得た麝^{なや}2匹を, 秀吉に献上する (和漢三才図会)。北方系のジャコウジカではなく, ジャコウネコだろう。
●11月, 平戸の松浦道可 (初世鎮信の父), 孔雀を秀吉に献上 (史料綜覧)。
●12月, 吉川広家, 朝鮮より生虎を秀吉に送る (史料綜覧)。
- 文禄4 1595 ●4月, 吉川広家, 朝鮮より豹を秀吉に送る (史料綜覧)。生豹か皮かは不明。
●本年刊の『羅葡日辞典』に「トコムシ:cimex」とあるのはトコジラミ (床虱=南京虫)。その侵入は幕末とされてきたが, 南方との交流が頻繁だったこの頃, すでに日本へ入っていた。ただ, 定着しなかったのだろうか。
- 慶長1 1596 ●9・8, 土佐にイスパニア船が漂着。秀吉, 麝香10・猿15・鸚鵡2を同船より没収 (通航一覽179)。麝香はジャコウネコか。→1594
●朝鮮からの帰還者, 高麗雉 (コウライキジ) を持ち帰る (当代記)。
- 慶長2 1597 ●7・24, ルソン総督が秀吉に贈った象が大坂に到着 (日本王国記, 鹿苑日録) し, 29日に禁裏でお目見え, 30日には京都の人々も見物する (左大史孝亮記)。
●8・4, 大泥国^{バタン}よりエンブ鳥1羽 (?) とインコ2羽を献上 (鹿苑日録)。
- 慶長3 1598 ●島津義弘が朝鮮から牛馬 (ウシウマ: 小型馬) 5頭を持ち帰る。種子島で繁殖させ, 20世紀に及んだが, 昭和21年 (1946) に絶滅 (薩摩博物学史)。
●日本では筑紫平野にだけ生息するカササギも, 佐賀城主鍋島直茂または柳河城主立花宗茂が朝鮮からこの頃に持ち帰ったという (福岡県百科事典)。
●平戸藩主松浦鎮信^{しげのぶ} (初世), 朝鮮から持ち帰ったコウライキジを, 平戸近辺の多久島に放す。少なくとも文政初年までは同島に存続 (甲子夜話初編21)。
- 慶長6 1601 ●5月, 安南から徳川家康に孔雀の子5羽が贈られる (通航一覽171)。
- 慶長7 1602 ●6・28, 交趾^{コーチン} (現ベトナム北部) から虎1・象1・孔雀2を家康に献上。家康はその象と虎を豊臣秀頼に贈った (通航一覽171, 時慶卿記)。
- 慶長10 1605 ●本年長崎で刊行のイエズス会宣教師編『日葡辞書』に「スイギユウ・ヒツジ・ヤギユウ [=ヤギ, 注6]・ロバ・アヒル・ガチョウ・クジャク・ハッカカン・ハハチョウ [ハッカチョウ]」の渡来鳥獣名が収録されている。
- 慶長15 1610 ●9・9, 安南船が鸚鵡・孔雀・錦鶏各1羽を献上 (実紀)。
- 慶長16 1611 ●8・24, 細川忠興, 孔雀・豹を家康に献上 (実紀)。
- 慶長17 1612 ●8・28, 蘭人, 駿府で家康に泰吉了 (キユウカンチョウ=九官鳥) と駝鳥 (ヒクイドリか, ダチョウか不明: →1631) を献じる (実紀, 当代記)。
- 慶長19 1614 ●9・1, 家康の外交顧問役ヤン・ヨーステン, 江戸の若君に奉りたいとして, 駿府で家康に虎の子2頭と鸚鵡1羽を献上 (通航一覽240)。
- 元和1 1615 ●⑥・9, 平戸藩主松浦隆信^{まつら}, 高麗鴨を家康に献上。子孫の松浦静山は, 嶋鴨ではないかという (甲子夜話続編94)。
- 元和2 1616 ●5・16 (英暦6・19), 平戸英商館長コックス, 明商から貰った金魚2匹を, 懇願されて松浦隆信に与える (英館日記)。→次項, 1623

- 元和4 1618 ●3・21 (英暦4・6), 平戸英商館長コックス, 明商から贈られた金魚のうち1匹をふたたび松浦隆信に与える (英館日記)。→前項
- 元和5 1619 ●文禄3年 (1594) から本年まで滞日したアピラ・ヒロンの『日本王国記』は, 日本に綿羊はいないが, ヤギは少しいる, ガチョウとアヒルもいると記す。
- 元和9 1623 ●元和年間 (1615~本年) に金魚が渡来 (大和本草)。元和2年の記事のほか, 「元和五年十月, 外船納錦魚」 (十三朝紀聞), 「元和六年, 朝鮮より金魚渡る」 (武江年表) などの記録もあり, 何回も持ち渡られたのだろう。→1616
- 寛永8 1631 ●1月刊の辞書『新刊多識編』に「駝鳥ヒクイドリ」とあり, これ以前のヒクイドリ渡来を示す。→1612 [注7]
- 2・12, 将軍家光, 大僧正天海に孔雀1羽を下賜 (実紀)。
- 寛永9 1632 ●9・9, 長崎奉行竹中采女正重義, インコ9と孔雀・鶴・毛長猫・麝香猫各1を献上 (実紀)。
- 9・15, 平戸藩主松浦隆信, 蘭館から得たインコ数羽を献上 (蘭館日記)。
- 寛永10 1633 ●2・4, 対馬藩主宗義成^{そうよしなり}, 家光に朝鮮鶴(?)を献上 (史料綜覧)。
- 9・24, 長崎より, 雀6 (外国産小鳥か)・インコ3・猿1を献上 (実紀)。
- 12・4, 平戸藩主松浦隆信^{まつら}, 犬・鸚鵡・洋馬・孔雀・猫を注文 (蘭館日記)。
- 寛永11 1634 ●3・28, 蘭館献上のペルシア馬1頭・ロバ1頭, 江戸に到着 (蘭館日記)。
- 寛永12 1635 ●9・21, 平戸藩主松浦隆信が家光にインコと「かしわり」 (=カズワル=ヒクイドリ) を献上 (実紀)。ヒクイドリ生鳥のもっとも古い記録か。→1631
- 9・25, 松浦隆信, オランダ東インド総督に贈物の礼状を記す。贈物のなかに風鳥 (フウチョウ, 剥製か) 2羽がある (蘭館日記)。
- 寛永14 1637 ●10・7, 平戸新藩主松浦鎮信^{しげのぶ} (二世) が犬・雉・インコ・鳩を献上 (実紀)。
- 寛永15 1638 ●4・5, 江戸参府の蘭館長, ペルシア馬1・喜望峯産山鶉1を献上 (実紀)。
- 寛永16 1639 ●5・1, 江戸参府の蘭館長, かるくん鳥 (シチメンチョウ) 雌雄と犬などを献上。かるくん鳥は尾張藩世子徳川光友に下賜 (実紀, 蘭館日記)。
- 9・11, 西尾藩主太田資宗が長崎より帰り, インコと砂糖鳥 (サトウチョウ, インコの種類) を将軍家光に献上 (実紀)。甘いものを好むのが名の由来。
- 9・27, 家光, 加賀藩主前田光高に和蘭雉(?)を下賜 (実紀)。
- 寛永18 1641 ●12・21, 江戸参府の蘭館長, 金鶏1対・斑毛鶏1・はるしや鳥3・紅白インコ1対・鶴1対を献上 (実紀)。キンケイ以外は種名がわからない。
- 寛永19 1642 ●5・14, 家光, 紀伊藩世子の徳川光貞に, 八重山蝙蝠 (クビワオオコウモリ) を下賜 (実紀)。
- 寛永20 1643 ●寛永年間 (1624~本年) の作とされる静嘉堂蔵「四条河原遊楽図屏風」に豪猪 (ヤマアラシ) の見世物が描かれている (近世風俗図譜5)。
- 正保1 1644 ●3・16, 家光, 江戸城三の丸で孔雀の雛を見る (実紀)。すでに孔雀の繁殖に成功していたことがわかる。

- 正保3 1646 ●12・1, 江戸参府の蘭館長, 白鸚鵡2・ヒクイドリ1・ラクダ2を献上(蘭館日記)。1000年ぶりで来たラクダは, 翌正保4年2・18, 松平万千代と松平三左衛門に下賜された(実紀)が, 以後の消息は不明。→599 [注2]
- 正保4 1647 ●4・14, 清船がロバ2頭・水牛3頭を持ち渡る(蘭館日記)。
- 慶安1 1648 ●10・6, 蘭館, 紀伊藩主徳川頼宣の注文した水牛2頭を同藩に渡す。頼宣はこれ以前にも水牛2頭を購入している(蘭館日記)。
- 慶安4 1651 ●12・28, 江戸参府の蘭館長, 風鳥5羽(フウチョウ, 剥製であろう)とインコ1羽を献上(実紀)。→1635
- 承応1 1652 ●11・19, 『隔莫記』本日条に, 広橋兼賢邸で嶋鶉を見た^{かくめい}と記す。→1538
- 承応2 1653 ●7・5, 『隔莫記』本日条に, 広橋兼賢所持の珍禽として「八頭」「黒白斑の鳥」を挙げる。前者はヤツガシラだが, 後者はホシガラスか。
- 承応3 1654 ●7・10, 『蘭館日記』本日条に, 津藩主藤堂高次にヒクイドリ2羽を渡す予定, 7・14条には將軍にインコ2羽, 津藩主にインコ5羽・リス3匹, 加賀藩主にインコ1羽を売り渡すつもり……と記す。
- 明暦2 1656 ●ジャコウネズミが長崎に侵入し, 同地にて増える(通航一覽272)。→1737
- 明暦3 1657 ●1・15, 江戸参府の蘭館長, 石割鳥(ヒクイドリ)を献上(通航一覽242)。
- 万治1 1658 ●1・15, 江戸参府の蘭館長, 「ほうよろすてれいす」(ダチョウ)1羽を献上する(松田1987, 実紀)。江戸時代でダチョウが来た唯一の例だが, 5カ月後に江戸城で死んだ。[注8]
- 3・14, 福岡藩主黒田光之, 白鸚(ハッカン)1羽を献上(実紀)。
- 4月, 江戸堺町で, 孔雀・鸚鵡・インコの見世物(松平大和守日記)。
- 万治2 1659 ●2・28, 江戸参府の蘭館長, べんがら牛2頭を献上(通航一覽242)。
- 万治3 1660 ●3・4, 長崎奉行甲斐庄喜右衛門, ロバと九官鳥を献上(実紀)。
- 3・12, 村上藩主松平直矩^{なおのり}, チンを貰う(松平大和守日記)。小型犬の初来は古い(→824)が, 改良により現在のチンが現れたのは江戸時代らしい。
- 寛文2 1662 ●3・26, 薩摩藩主島津光久, 鸚鵡と音呼を献上(実紀)。
- 寛文6 1666 ●9・8, 津藩主藤堂高次, 石割(ヒクイドリ)と九官鳥を献上(実紀)。
- 11・3, 村上藩主松平直矩, 江戸で九官鳥と「ちやうせう鳩」(チョウシヨウバト=長生鳩)を鳥屋から取り寄せる(松平大和守日記)。
- 寛文7 1667 ●3・15, 村上藩主松平直矩, 長崎伊予屋から, 風鳥を一つ購入(松平大和守日記)。剥製だろうが, 蘭品を扱う店でそのような品も入手できたのである。
- 5・12, 狩野常信がヘキチョウを写生(鳥写生図巻)。[注9]
- 8・18, 清船, 徳川光圀注文の猿3・麝香猫3を将来(唐通事会所日録)。
- 寛文8 1668 ●2・28, 江戸参府の蘭館長, ペルシア馬の牡2頭を献上。この2頭と在来種の牝のあいだに子が生まれた(岩生1980・30~31頁)。
- 寛文11 1671 ●6・24, 狩野常信が江戸城飼育のヤツガシラを写生(鳥写生図巻)。

- 寛文12 1672 ●寛文年間(1661~本年)の作「江戸堺町^{ふきやちよう}葺屋町小芝居絵巻」に、孔雀見世物の風景が描かれている(見世物研究)。
●寛文年間に、清よりセイラン(青鸞)雄が渡る(博物館禽譜)。
- 延宝1 1673 ●本年大坂に持ち込まれたインコが100両余で取り引きされた(撰陽奇観)。
- 延宝3 1675 ●6・19, 幕府の無人島(小笠原諸島)探検隊が品川に帰着、オガサワラオオコウモリ・メグロ・オガサワラハシブトゴイ・オガサワラマシコ(後2種はのち絶滅)のほか、セイケイらしい鳥を持ち帰る(通航一覧・附録12, 甲子夜話初編21)。狩野常信は上記メグロをスケッチ(鳥写生図巻)。^[注10]
●道頓堀で孔雀・鸚鵡・唐鳥の見世物(見世物研究)。
- 延宝4 1676 ●3・15, 江戸参府の蘭館長, ロバ2頭を献上(通航一覧242)。
●5・8, 狩野常信, ダルマイインコを写生(鳥写生図巻)。
- 延宝6 1678 ●2・15, 江戸参府の蘭館長, 風鳥3羽(剥製か)を献上(通航一覧242)。
●3・1, 対馬藩, 藩外持ち出し禁制品を定めるが, その一つに「朝鮮おし鳥」がある(長崎県史2)。後の用法ではカムリツクシガモを指す名なので, この珍種がすでに朝鮮から対馬へ持ち込まれていた可能性がある。
- 延宝7 1679 ●12・17, 狩野常信, 死んだオニカッコウを写生(鳥写生図巻)。海外から持ち渡られたのか, 迷鳥が捕獲されたか不明だが, 日本で唯一の記録である。
- 延宝8 1680 ●10・24, 狩野常信がアカヒゲ雌雄を写生(鳥写生図巻)。
- 貞享2 1685 ●7月, 犬猫を繋ぐことを禁止。生類憐み令の発端で, 以後動物の飼育が厳しく制約される(磯野1997)が, その間にも長崎には鳥獣が持ちこまれていた。
- 元禄4 1691 ●9・6, 狩野常信, ヤイロチョウを写生(鳥写生図巻)。
- 元禄10 1697 ●6月刊行の『本朝食鑑』には, 錦波羅(キンバラ)・黄鳥(コウライウグイス)・山鵲(サンジャク)・鷓鴣(シャコ類)・南京鳩(?)・文鳥(ブンチョウ)・紅雀(ベニスズメ)・烏骨鶏(ウコツケイ)・唐麻呂(トウマル)・チャボ・シャモが持ち渡られている, 風鳥(オオフウチョウとヒヨクドリ, 剥製か)が載来されたことがある, 長生鳩や文鳥は繁殖にも成功しているなどと記す。
- 元禄13 1700 ●12・6, 徳川光圀没。光圀は孔雀・青鸞(セイラン)・白鷗・鶺鴒(カササギ)・鸚鵡・音呼類・金鶏・鶯鳥・鳴鶉・八々鳥・高麗雉・てうせう鳩(長生鳩)・紅雀・吐綬鶏(シチメンチョウ?)・豪猪(ヤマアラシ)・羊・尾長猿・霊猫(ジャコウネコ)・ロバ・ブタなどを飼育していた(桃源遺事)。
- 宝永2 1705 ●8・23, 清船, 錫鶏(?)1羽を持ち渡る(唐通事会所日録)。
- 宝永3 1706 ●7・28, 清船, 錦鶏2羽を持ち渡る(唐通事会所日録)。
- 宝永4 1707 ●本年清船が持ち渡った鳥は, 鶴1・孔雀2・インコ1(唐通事会所日録)。
- 宝永5 1708 ●5・28, 清船, 錦鶏3・竹鶏1を将来。本年, ほかに孔雀・インコ・画眉鳥(ガビチョウ)各1も持ち渡る(唐通事会所日録)。
- 宝永6 1709 ●1・20, 生類憐み令撤廃(実紀), 鳥獣虫魚の売買・飼育も元に復する。

- 3・20, 清船, インコ・画眉鳥 (ガビチョウ)・金雀鳥 (カナリア) 各1を将来。この年, ほかに相思鳥 (ソウシチョウ) 2・錦鶏 (キンケイ) 4・八哥鳥 (ハッカチョウ) 1・告天鳥 (コウテンシ: ヒバリの類) 1も来る (唐通事会所日録)。
- 8月, 本月刊の『大和本草』は, 中国原産の反毛鶏 (サカゲ) を記載。
- 宝永7 1710 ● 8・7, 清船, 孔雀^{インコ}1羽を持ち渡る (唐通事会所日録)。
- ⑧・26, 錦鶏7・青鸚哥2・相思鳥2・画眉鳥3・八哥鳥1を, 清船から買い上げる。(唐通事会所日録)。
- 9・10, 黄鳥 (コウライウグイス) と山鵲 (サンジャク) を明年持ち渡るように, 高木作右衛門 [注11] が清商に命じる (唐通事会所日録)。
- 9・25, 高木作右衛門, 錦鶏・相思鳥 (ソウシチョウ)・画眉鳥・孔雀・砂糖鳥 (サトウチョウ) の出所と飼育法を清商に尋ねる (唐通事会所日録)。
- 12・24, 狩野常信が江戸城に飼われていた文鳥を描く (鳥写生図巻)。
- 正徳1 1711 ● 8月, 本月成稿した『愛禽徒然草』は, 孔雀鳩・しやむる鳩 (?)・長生鳩・南京鳩などを挙げ, 白鷗・嶋鴨・文鳥が繁殖していることにも触れる。
- 正徳2 1712 ● 3・3, 狩野常信が江戸城に飼われていた紅雀を描く (鳥写生図巻)。
- 正徳3 1713 ● 本年刊の『和漢三才図会』に, 金魚は筑前と堺で多数飼育されていること, 豚は長崎と江戸で飼われているが, 近年は少ないなどの記事がある。
- 正徳5 1715 ● 6・3, 清より斑鳩 (ジュズカケバトか, シラコバト) 2羽来る (唐通事会所日録)。
- 享保2 1717 ● 7月, 生類見世物の禁が本年解除されたので, 京都四条河原で孔雀・鸚鵡・錦鶏・音呼 (インコ) の見世物。久々の見世物は大当たり (月堂見聞集) 。
- 11・15, この日の奥書がある『諸禽万益集』は, 唐鳥として, 「金鳩・ちうせう鳩 [長生鳩]・だんどく・かなあり・十四まつ [=十姉妹, 注12]・ぶんちよう・ひいんこう [緋インコ]・あふむ・八ツ頭・金鶏・はつかん・がてう [鶯鳥]・花鴨 [?]・くじやく・から国 [からくん?]・だてう [ダチョウ=ヒクイドリ]・らんけい [蘭鶏]」の17品を挙げる。
- 12月, 高麗雉と錦鶏の雌雄を伊豆大島に放つ。翌年・翌々年も両種を放鳥するが, すべて行方不明となる。また, 大島で当時200頭にも増えていた羊 (じつはヤギ) を, この年2頭捕らえて幕府に献上 (伊豆大島志考)。
- 蘭より, 将軍御用の猯犬2匹来る (斎藤1936)。
- 享保3 1718 ● 6月, 幕府, 唐馬の持ち渡りを清商に密命する (大庭1980, p.197)。清からの牛馬持ち出しは国禁だった。
- 幕府, 火食鳥2羽・猯犬2匹を蘭館に注文 (長崎洋学史)。
- 享保5 1720 ● 2・11, 清商, 享保3年の密命により唐馬2頭を持ち渡る (通航一覽199)。
- 7・22, 蘭船が, 前年注文された火食鳥2羽と猯犬2匹を持ち渡るが, 火食

- 鳥1羽は死ぬ(長崎洋学史)。→1718
- 享保6 1721 ●幕府, 獵犬6匹(牡2, 牝4)を蘭館に注文(長崎洋学史)。
- 享保7 1722 ●幕府, 獵犬を蘭館に注文(長崎洋学史)。
- 享保8 1723 ●9月, 幕府, 洋馬(牡3, 牝2)を蘭館に注文(通航一覽245)。
●12月, 清商が唐馬3頭(牡1, 牝2)を持ち渡る(通航一覽199)。
- 享保9 1724 ●2・4, 対馬藩, カンムリツクシガモ(鴛鴦)雌雄を幕府に献上。幕府が享保6年に始めた朝鮮薬材調査の一環として, 対馬藩が同7年に朝鮮で入手し, 前年に幕府から献上を命じられていた(田代1999, 大雲院公実録)。このカモは朝鮮付近に生息していたらしく, 以後幕末までに何回か渡来し, また国内でも迷鳥として捕獲されているが, 20世紀前半に絶滅したらしい。
●5・17, 「鳩喚と云鳥, 今日御所へ来る」(槐記)。鳩喚は九官鳥。
- 享保10 1725 ●6・14, 蘭船が牡馬5頭(ペルシア馬3, ジャワ馬2), 孔雀2・鷲2・青インコ1・紅インコ1・紅雀4・文鳥7・狎^{チン}1・中犬2・狩犬の子1を持ち渡る(通航一覽245)。
●11・8, 清船が唐犬4匹を持ち渡る(和漢寄文4)。
- 享保11 1726 ●2・28, 清船, 七星魚(タイワンドジョウ)を持ち渡る(随観写真)。
●5月, 清商に唐犬数匹を注文, 続いて8月にも注文(和漢寄文4)。
●6・21, 蘭船が洋馬5頭(牡3, 牝2)と麝香猫2匹を携え来るが, 麝香猫のうち1匹は航海中に死ぬ(長崎洋学史)。
●12月, 幕府, 清船主呉子明に象の持ち渡りを命じる(通航一覽175)。
- 享保12 1727 ●2・21, 長崎奉行献上のムスクリアトカツトウを江戸隅田村御前裁場(鳥獸飼育場)に放つが, 6月頃行方不明となる(御場御用留)。「面犬のごとく, 形猫のごとく, 尻尾并身のしなひはイタチのごとく, 立歩行人のごとく, 大き猫に似たり。よく鼠と蛇とを取食」(通航一覽240)。マングースか。
●6・3, 蘭船が牡馬2頭を持ち渡る(斎藤1922)。
●9月, 蘭船将来の黒毛鶏5羽を普請奉行稲葉多宮に預ける(通航一覽240)。
●清船, 浙江産竹鶏(コジュケイ)雄を将来(外国産鳥之図)。[注13]
●房州の嶺岡牧に白牛3頭(乳牛牝2, 牡1)を放牧。繁殖は成功し, 寛政4年(1792)には70余頭にも達した(白牛酪考)。
- 享保13 1728 ●6・13, 広南(現ベトナム)からインドゾウ牡1頭(7歳)と牝1頭(5歳)が持ち渡られる。享保11年の注文によるものだったが, 牝は9・11に長崎で死に, 牡だけが翌年江戸へ送られる(通航一覽175, 享保日記)。
●6・19, 蘭船, 麝香猫2匹を持ち渡る(長崎洋学史)。
●幕府, 蘭館に馬数頭と獵犬3匹を注文(長崎洋学史, 岩生1980)。
- 享保14 1729 ●1・19, 隅田村御前裁場(→1727)に高麗雉3羽(雄2, 雌1)を放つ。本月は別の日にも, 4羽を放す(御場御用留)。

- 3・13, 前年渡来した牡の子象, 長崎を出発して江戸に向かう。象使い 2 人・清人の通訳 2 人も同行, 4・28には京都御所で中御門天皇と靈元法皇が象を見物, 5・25江戸に到着して浜御殿に入り, 5・27に將軍吉宗が上覧した。この象は寛保 2 年 (1742) に死ぬまで江戸に留まった。[注14]
- 7・2, 蘭船, ペルシア牝馬 2・孔雀 2・唐犬 1・洋犬 1 を持ち渡る (通航一覽245, 斎藤1922)。
- 11・15, 対馬藩, 鴛鴦 (カンムリツクシガモ) 雌雄 1 対を幕府に献上 (大雲院公実録)。→1724
- 享保15 1730 ● 2・28, 江戸参府の蘭館長, さとう鳥 2 羽を献上 (通航一覽242)。
● 6・29, 蘭船, ペルシア馬 2 頭 (牡 1・牝 1) を持ち渡る (斎藤1922)。
● 6・30, 象を希望者に引き渡す旨を触れる (通航一覽176)。20名ほど応募したが, 適切な者はおらず, 浜御殿で飼いつける (豊芥子日記)。
● 11・7, 蘭船将来のペルシア馬牝牡・からくん鳥 (シチメンチョウ)・^{ベンガラ}弁柄鳩 (ベニジュズカケバト)・ムスクリヤアトカット (マングース?→1727) それぞれ雌雄が, 江戸城に到着した (享保日記)。
- 享保16 1731 ● 6・6, 隅田村御前裁場 (→1727) に, 竹鶏を放つ。翌17年 2 月にも 2 羽を放つが, いずれも死んだり行方不明になった (御場御用留)。
- 享保17 1732 ● 3・22, 清船, 尾長雉の雄 3 羽を将来。享保15年注文の分 (外国産鳥之図)。
● 秋, 備中・備後で犬に狂犬病が流行, 翌年も関西で流行 (月堂見聞集)。洋犬が持ち込んだといわれ, 10年ほどで東北まで拡がった。
● 蘭館に獵犬 3 匹を注文 (長崎洋学史)。
- 享保18 1733 ● 4 月, 江戸両国回向院の城州嵯峨积迦如来開帳の際, 本所一ツ目御石置場で象を見世物とする。中野村源助・柏木村弥兵衛・押立村平右衛門が, 浜御殿から象を拝借した (享保撰要類集・生類, 甲子夜話 3 編10)。→1741
● 7・25, 清船が尾長雉の雌 1 羽を将来。8・18に死ぬ (外国産鳥之図)。
- 享保19 1734 ● 2・28, 江戸参府の蘭館長, ^{チン}狎 1 匹を献上 (実紀)。
● 6・29, 蘭船が, 牡馬 6 頭と馬車を載来する (斎藤1922)。
● 7・15, 幕医丹羽正伯, 江戸城で八哥鳥 (ハッカチョウ)・竹鶏 (コジュケイ)・黄鳥 (コウライウグイス) を拝見 (九淵遺珠)。
● 7・23, 江戸城から幕医丹羽正伯に異鳥の嘴が届けられ, 正伯は見解を記して吉宗に差し出す (九淵遺珠)。図から, サイチョウ (犀鳥) の嘴とわかる。
● 8 月, 宝永 4 年 (1707) 以来蘭船が次の鳥類を持ち渡ったと, 長崎から幕府に報告 (阿蘭陀人日本渡海発端) ——孔雀・駄鳥 (ヒクイドリ)・鸚鵡・鳩喚 (キュウカンチョウ)・音呼 (インコ)・文鳥・長生鳩・金鳩・音鳩 (「クルウンドイフ」=カンムリバト)・弁柄鳩 (ベニジュズカケバト)・^{ジャガタラ}咬嚼吧鳩 (カノコバト?)・からくん (シチメンチョウ)・ひいちい (パイチイ=コシジロヒヨド

- リカコウラウン)・砂糖鳥(サトウチョウ)・まるてんちい(各種のムクドリ類)・鳶鳥・ばるけん(バリケン)・かなありや・碧鳥(ヘキチョウ)・十姉妹・弁柄雀(「紅雀とも云」)・孔雀鳩・^{シヤムロ}暹羅鳩(?)・白鳩・阿蘭陀^本国鳩(食用ドバト)・鶏・家鴨(アヒル)。
- 享保20 1735 ●3月、江戸城で飼われていた鴛鴦(カンムリツクシガモ)が卵を産み、アヒルに抱卵させたところ、3羽が孵化した(九淵遺珠)。
 ●③・1、江戸参府の蘭館長、九官鳥を献上(通航一覧243)。
 ●③・21、清船が蛾嘴鳥(コイカル)と相思鳥を将来、本日その図を長崎奉行に渡す(外国産鳥之図)。
 ●11月、長崎奉行窪田肥前守、清産の^{シヤムロ}鷓鴣・^{ヨウケン}瑤禽(カケスの類)・八哥鳥・狎を幕府に送る(承寛裸録)。
 ●享保年間、ハリネズミ生品が朝鮮より渡来(本草図説)。 \rightarrow 1809
 ●享保年間、蛮船(おそらく蘭船)がペンギンの皮を持ち渡り、のち田村藍水が入手したと子息栗本丹洲が記した文が『堀田禽譜』に残る。 \rightarrow 1820
 ●享保年間、翠鵲(^{コンヨウケン}紺瑤禽、ルリカケス)、琉球より渡来。安永年間には1羽75両もしたが、その後多く渡り廉価になった(飼籠鳥)。
- 元文1 1736 ●4月、幕府、長崎より砂糖鳥2羽と^{セイラン}青鸞1羽を取り寄せる(承寛裸録)。
 ●6・5、江戸城吹上御苑に吉宗の供をした人が、からくん(シチメンチョウ)・孔雀の雛・竹鶏を目にしている(半日閑話19)。
 ●7・6、蘭船が馬3頭(牡2・牝1)を持ち渡る(長崎志)。
 ●清船、ハイイロコクジャクを持ち渡る(博物館禽譜)。
 ●元文初年、高麗雉を下総稻毛辺に放ち、繁殖させる(日東本草図纂)。
- 元文2 1737 ●2・28、江戸参府の蘭館長、きうくわん鳥(九官鳥)2羽・獵犬1匹を献上する(通航一覧243)。
 ●7・13、江戸滝野川近辺に高麗雉と白雉を放す(実紀)。
 ●7・15、蘭船、牡馬2頭を将来。享保10年(1725)から本年までに蘭船が持ち渡った馬は27頭(牡21・牝6)となる(斎藤1922)。
 ●8・7、清船が青鷄(セイケイ)を持ち渡り、本日その図を長崎奉行に提出する(外国産鳥之図)。本種はクイナの類で、きわめて美しい。
 ●9・8、本日幕府に提出された『薩州産物絵図帳・春夏』中の「こうね」(香鼠か)はジャコウネズミ。おそらく、琉球から薩摩へ侵入。 \rightarrow 1656
- 元文5 1740 ●6・28、清船がタイマイ(玳瑁)生品1匹を持ち渡る(通航一覧264)。
- 寛保1 1741 ●4・27、享保14年(1729)以来浜御殿で飼われていた象が、この日から中野村の源助所持の土地に移り、源助と淀橋水車弥兵衛が管理する(享保撰要類集・生類、豊芥子日記、承寛裸録)。 \rightarrow 次年
- 寛保2 1742 ●6・28、カンボジア船が孔雀1対・火鷄(シマハツカン)1対・山鷄4対・

- タイマイ 4 匹を持ち渡る (通航一覽264, 外国産鳥之図)。
- 12・12, 前年中野村に移った象が本日死ぬ (享保撰要類集・生類)。
- 寛延 1 1748 ●冬, 『金魚養玩草』刊。金魚についての最初の刊本であり, ランチュウ (卵虫魚) がすでに渡来していることもわかる。
- 宝暦 1 1751 ●6・9, 本日, 「ランチュウノ子」を写生 (異魚図纂)。この頃描かれた『衆鱗図』にもランチュウ成魚の図がいくつもあり, この品種が広まり始めていることが明らか。→前項
- 宝暦 6 1756 ●『華蛮交易治聞記』巻3に「宝暦六年頃」として禽類24品・獸類3品の元値が記録されている。たとえば, キウクハン (九官鳥) 300目, 孔雀120目, 紅音呼78匁, 青音呼78匁, からくん (シチメンチョウ) 58匁5分, 砂糖鳥45匁, 八哥鳥 (ハッカチョウ) 37匁5分, カナアリヤ鳥37匁5分, 鸚鵡32匁5分, 紅雀15匁, 十姉妹13匁, 文鳥7匁8分, 栗鼠15匁, 狎犬65匁など (磯野1998)。
- 宝暦 8 1758 ●夏, 大坂道頓堀で珍鳥の見世物。猩々音呼・青音呼・色音呼・達磨音呼・黄鳥 (コウライウグイス)・鸚鵡・錦鶏・鳥鶯 (クロヒヨドリのシマヒヨドリ型, 注4) の8品で, 大当たり。高槻藩主永井直行侯の愛禽を, 没後に譲り受けたという。同じく夏に京都洛北今宮で, 晩秋には江戸で興行 (撰陽奇観, 物類彙考, 半日閑話)。[注15]
- 本年田村藍水が長崎で, 蘭船中にいたサソリ生品を入手 (物類品隣)。
- 本年描かれたらしいモンシロチョウの図が細川重賢著『昆虫胥化図』にある。同じ頃の作である伊藤若冲画『芍薬群蝶図』にも, モンシロチョウが描かれている。この頃までに本種が大陸から侵入していたらしい (小西1993, 1994)。
- 宝暦 9 1759 ●大坂と江戸で孔雀の見世物 (撰陽奇観, 見世物研究)。
- 宝暦12 1762 ●3・13, 会津若松の七日町で唐鳥の見世物: 猩々音呼・錦鶏・鳴からす (?)・七色音呼など (若松興行見聞)。
- 7・22, 蘭船, ジャワ馬の牡2頭を持ち渡る (長崎志)。
- 清船, 画眉鳥・十姉妹 (ジュウシマツ)・黄麗鳥 (コウライウグイス) を持ち渡る (海舶来禽図彙説)。
- 宝暦13 1763 ●4・8, 本日より会津若松の中二ノ町で孔雀の見世物 (若松興行見聞)。
- 白頭鳥 (クビワムクドリ) 渡来 (鳥類絵)。
- 明和 2 1765 ●9・18, 將軍家治, ペルシア馬の種馬3頭を蘭館に注文 (岩生1980)。
- 生きた鯪 (センザンコウ), 京都で見世物 (重修本草綱目啓蒙・増補)。
- 明和 3 1766 ●7・8, 蘭船, ズグロゴシキセイガイインコ (頭黒五色青海音呼) を持ち渡る (鳥類絵)。
- 朝鮮目白 (チョウセンメジロ) の繁殖に成功する (百千鳥)。
- 明和 4 1767 ●清船, 鷓鴣 (コモンシャコ)・白頭翁 (シロガシラ)・竹鷄 (コジュケイ) を持ち渡る (海舶来禽図彙説)。

- 明和5 1768 ●6・25, 蘭船, ペルシア産牡馬1頭を将来。以後, 明和8年まで毎年牡馬を持ち渡る(通航一覧245)。計7頭。
- 明和6 1769 ●7・4/7・7, 蘭船, ペルシア馬牡2頭を持ち渡る(通航一覧245)。
●清船, 白鷗(ハッカ)を持ち渡る(海舶来禽図彙説)。
- 明和7 1770 ●8月, 『堀田禽譜』に「明和七年庚寅八月始見之」として「ビイニス」(コウヨウジャク=紅葉雀)の図がある。
- 明和8 1771 ●明和末年, 秋月侯江戸屋敷で九官鳥の繁殖に初めて成功(飼籠鳥)。
- 安永1 1772 ●7月, 会津若松の左下り観音開帳で, 錦鶏や五色鳥(五色音呼?)などの見世物(若松興行見聞)。
●8・4, 薩摩藩主島津重豪^{しげひで}, 蘭館から購入した豪猪(ヤマアラシ)2匹のうち, 1匹を老中田沼意次^{おきつぐ}に進呈(半日閑話)。**→次項**
●12・29, 幕臣の博物家田村藍水が, 幕府からヤマアラシ1匹を拝領(田村公用日記)。おそらく, 前項で田沼に贈られた個体。**→1775**
- 安永2 1773 ●春より夏, ヤマアラシ1匹, 浪華道頓堀で見世物(撰陽奇観)。**→1777**
●6・6, 御所に孔雀・鸚鵡・嘲々鳥(ハッカチョウ)などを召し出し, 後桃園天皇が内々で見物(続史愚抄)。四条河原辺の見世物と呼び寄せたか。
●7月, 本月刊の『[唐鳥秘伝]百千鳥』は外国産鳥類65品だけの飼育書で, 江戸時代の出版では唯一の例。本年表での既出品以外に, じゃがたら雀(シマキンバラ), 白子鳩(シラコバト)などを記す。キンケイやシチメンチョウが繁殖していたこと, カナリアやセイケイはまだ珍しかったことなどもわかる。
- 安永4 1775 ●3月, 田村藍水, 長崎の大通詞吉雄耕牛から譲られた綿羊牝を受け取る。代金22両だが, 牝は本年12月に病死(田村公用日記)。
●6月, 清船がインコ4・ハッカチョウ6・斑鳩(ジュズカケバトか, シラコバト)1を持ち渡る(瓊浦偶筆)。
●田村藍水, 自家のヤマアラシを浅草寺境内で見せる。ただし, 丸薬を買った客にだけという(武江年表, 譚海32)。**→1772**
- 安永6 1777 ●8・9, 京都でヤマアラシの見世物(続史愚抄)。月日不明だが, 本年名古屋七ツ寺で見世物になったヤマアラシもこの個体か(名陽見聞図会・3上)。
- 安永7 1778 ●3・15, 会津若松の大町で孔雀の見世物(若松興行見聞)。
●7・17/7・20, 蘭船がペルシア馬牡2頭とヒクイドリを持ち渡る(長崎志統編, 万国管闕)。馬の輸入は以後途絶えた。
●9・8, 三浦梅園が長崎代官高木作右衛門宅で, 尾長雉・白鷗・駄鳥(ヒクイドリ)・文鳥・相思鳥・インコ・喜雀(カササギ)・十姉妹などと, ペルシア馬2頭が飼われているのを見る。(帰山録草稿)。**→次項**
●9・23, 三浦梅園, 大通詞吉雄耕牛宅を訪れ, 猿に似た「ろやある」を見る(帰山録草稿)。これは「ロイアールト」(原猿のスローロリス)。**→1833**

- 安永 8 1779 ● 2・1, 木村兼葭堂, 大坂で駝鳥(ヒクイドリ)を見物(兼葭堂日記)。見世物ではなく, 長崎から江戸に送られる道中の個体らしい。→次項
 ● 3・6, 江戸参府の蘭館長, 駝鳥(ヒクイドリ)を献上(佐竹曙山写生帖)。
- 安永 9 1780 ● 体長2尺の生きた鼈児(ワニの子)が長崎に渡来(万国管關)。
 ● 安永年間, 琉球から海和尚(カケスの一亜種)が将来(堀田禽譜)。
 ● 安永・天明年間, 「琉金」(リュウキン: 琉球金魚の意)が琉球から薩摩に渡る(日本の金魚)。
- 天明 1 1781 ● 栗本丹洲編『鳥巢獸類魚品石貝之写生』に「天明丑年[本年]紅毛人イギリスより買ひ来るカイマン[ワニ]……但し寅年[2年]に斃す。丑年には長三尺許, 寅年には五尺許」とあり, 図は吉雄家にあったという。前年の「鼈児」は, おそらくこのワニであろう。種名のカイマンは中南米産だが, この文での「カイマン」はワニ一般を指す語として使われている。→1800
 ● 鷓鴣(コモンシャコ)が薩摩より初めて江戸に来る(禽鏡3)。→1767
- 天明 2 1782 ● 4月, 四条河原で白鷗(ハッカク)の見世物(本草綱目会識)。
- 天明 6 1786 ● 駝鳥(ヒクイドリ)1羽, 幕府に献上される(内安録)。
 ● 将軍徳川家治の治世(1760~本年)に青鷄(セイケイ)4羽が献上され, 生き残った2羽が江戸城吹上御苑で飼われていた。また, 突厥雀(サケイ)が舶来したという(堀田禽譜)。
- 天明 7 1787 ● 1・14, 田村西湖(藍水の子), 駝鳥皮1羽分を拝領(田村公用日記)。江戸城吹上御苑に飼われていて, 前年の暮に斃れたというので, 前々項の個体か。
 ● 6・24, 蘭船, 山嵐(ジャワヤマアラシ)・類違からくん(カンムリバト)・弁柄鷺(カササギサイチョウ)・カアブス鳥(ギンバラ)を将来(唐蘭船)。
- 天明 8 1788 ● 3・9, 江戸参府の蘭館長, 「ヤールホーゴル」(カササギサイチョウ)の若鳥とサイチョウ(犀鳥)の嘴を献上(蘭山禽譜)。「蘭医……風鳥三四羽を載来」(観文禽譜)とあるフウチョウ(剥製)献上も, このときか。[注16]
 ● 5・27, 江戸躰寿館の薬品会に田村西湖が「エメウ」, じつはヒクイドリの剥製を出品(白井年表)。これは前年1月に拝領した駝鳥皮と思われる。
 ● 天明年間, 蘭人がカナリアを初めて雌雄で持ち渡り, 出島で飼って子を育てた。その親鳥を長崎奉行が貰い受けて江戸に持ち帰った。それまで雄だけが渡来していたので増やせなかったが, こうして以後は国内でも繁殖が盛んになったのである(鳥賞案子)。
 ● 天明年間, 「かあぶすかなありや」[注17]・類違十姉妹(セイコウチョウ=青紅鳥)・本国鳩(食用ドバト)・夕チアヒルが蘭船により載来, 告天子(コウテンシ)・珍花鳥(シキチョウ=四喜鳥)が琉球から持ち渡られた(鳥賞案子, 堀田禽譜)。
- 寛政 1 1789 ● 5・27, 江戸躰寿館薬品会に薩摩侯島津重豪が記年鳥(サイチョウ)の嘴を

- 出品（蘭畹摘芳筆録本・次編3）。
- ⑥・9／⑥・11, このときの蘭船が将来した鳥獣類の元値が『寛政元酉歳紅毛直組帳』に残る（成澤1993A）。1羽の値と持込数は：孔雀（140匁，8羽），類違からくん（カンムリバト？，250匁，12羽），駝鳥（ヒクイドリ，120匁，1羽），カナアリヤ（38匁，11羽），紅雀（17匁5分，14羽），文鳥（7匁5分，377羽），砂糖鳥（50匁，18羽），長生鳩（2匁8分，6羽），尾長猿（70匁，3匹）。→1756
- 夏，清国福州から紅羅雲（コウラウン）が来る（蘭山禽譜）。
- 青鷄（セイケイ）が渡来（水谷禽譜）。
- 寛政2 1790 ●5月，前年渡来したヒクイドリが大坂で見世物となる（兼葭堂雑録）。のち，京都・名古屋に廻る（水谷禽譜）。
- 夏，シキチョウが琉球から渡来（堀田禽譜，蘭山禽譜）。
- 夏，清船が海和尚（カケスの一亜種）を持ち渡る（蘭山禽譜）。→1780
- 夏，紺瑤琴（ルリカケス）が載来する（芳齋禽譜摘要）。→1735
- 寛政3 1791 ●8・12，会津若松の桂林寺町後ノ分で「だてう」（ヒクイドリ）の見世物が始まる。9・1に柳津，9・13に坪下杖に廻る（若松興行見聞）。
- 金沢の卯辰八幡で駝鳥の見世物（屋漏堂禽譜），江戸堺町河岸でも興行（武江年表）。前々年渡来の鳥が各地を巡っているらしい。→前年，次年
- 寛政4 1792 ●3月，伊勢神宮に近い地蔵街で駝鳥の見世物（成澤1998）。
- 7・8，蘭船がオランウータン1匹とロバ牝牝を持ち渡すが，オランウータンは長崎で死ぬ（唐蘭船，一話一言）。→1800
- 水野忠通長崎奉行時代（天明6年～本年）に蘭人が持ち渡るといふ風鳥剥製2点の図が『渡辺派鳥類図巻』にあり，コフウチョウの成鳥と幼鳥らしい。
- 寛政5 1793 ●7・5，蘭船，ロバを持ち渡る（博物館獣譜）。
- 寛政6 1794 ●7・5，蘭船，麝香猫2匹を将来。寛政2年に注文したもので，うち1匹はコジヤコウネコ（唐蘭船）。
- 清船持ち渡りの麝香猫1匹を幕医多紀元徳が購入して飼育し，3年後に死んだという（本草綱目纂疏13）。
- 寛政7 1795 ●3月，本月刊の『西遊記』の巻5に，「広島之城下……ぶた多し。……肥ふくれて色黒く……長崎にもあれども，すくなし」と記す。
- 6・6，蘭船が「コロンホーゲル」（カンムリバト）を持ち渡る（桃洞遺筆）。
- 9月，薩摩侯島津重豪，琉球から渡来した紅羅雲（コウラウン）と珍花鳥（シキチョウ）を献上（観文禽譜，堀田禽譜）。
- 大坂から江戸に「朝鮮むく」（カラムクドリ）が来る（堀田禽譜）。
- 寛政9 1797 ●8月下旬～10月上旬，尾張の大須でカンムリバトの見世物（水谷禽譜）。
- 寛政11 1799 ●冬，蝦夷で捕えた白熊を江戸に送る（東夷物産志稿）。ホッキョクグマか，

- ヒグマの白変かは不明。
- 清船、三呼鳥 (ハイイロミカドバト) を持ち渡る (堀田禽譜)。
- 寛政12 1800 ●5・25, 蘭船がオランウータンと「シユリカツト」(サラワクスンダリス) を持ち渡るが、オランウータンは長崎で死ぬ (唐蘭船)。→1792
- 8・16, 長崎通詞吉雄耕牛, 没。『通航一覧』245は「享和年中, 耕牛が蘭館を通して四尺のワニを取り寄せて飼育する」旨を記すが, 享和は耕牛の没後である。天明初年にワニを飼った事実がある (→1781) ので, その誤伝か。
- 9月, 本月刊行の『長崎聞見録』に, 「獅子頭金魚」(オランダシシガシラ) の図がある。普通の金魚の100倍の値だという。
- 寛政年間にはシチメンチョウを飼っているのを江戸でよく見かけたが, その後は絶えた (禽鏡3)。
- 享和1 1801 ●4・8, 大田南畝, 大坂四天王寺参詣の帰途に孔雀茶屋に立ち寄る。錦鶏・白鷗・灰鶴・孔雀5羽・高麗雉と羊がいた (芦の若葉)。孔雀茶屋は客寄せに珍鳥を置く店で, 寛政年間に出現し, 江戸は上野や浅草, 京都は祇園, 名古屋は若宮八幡や末広町にあった。花鳥=美鳥の意で, 花鳥茶屋とも呼ばれた。
- 夏, 京都で舶来のバザル獣, 別名ベゾアルの見世物。羊に似て, 体高三尺余, 総身淡黒色, 角は鉄のごとく三段に巻揚がる。享和3年には紀三井寺で見世物となる (本草余纂)。刷物の絵を見ると, ヤギの一品種か (宗田1994)。
- 享和2 1802 ●10月, 本月付の奥書をもつ『鳥賞案子』^{ちょうしょうあんし}は薩摩藩御鳥方比野勘六の著作で, 全300余品のうち唐鳥は約100品に達し, 来歴や飼育法に詳しい。尺八鳩 (ズアカアオバト) や牛鳩 (カラスバト) も記されている。[注18]
- 享和3 1803 ●7・8, アメリカ船が長崎に入港, フタコブラクダ 1と水牛2・ロバ2を持ち渡る。幕府は受け取らずに米船を退去させるが, ラクダの絵だけは数カ所に残っている (蘭館日記, 甲子夜話初編8)。
- 文化1 1804 ●6・5, 前年清商が持ち渡った鱧魚 (七星魚, タイワンドジョウ) のうち, 生き残った7匹を長崎奉行が將軍家斉の観覧に供する (桃洞遺筆4)。
- 11・30, 清船が相思鳥7・画眉鳥1・竹鶏1・山和尚 (カケスの類) 1を将来 (長崎表御用会計私記)。
- 文化2 1805 ●6月, 江戸麴町の鳥屋にいた黄梅鳥 (ズグロチャキンチョウ) の図が『堀田禽譜』にある。
- 清船, 竹鶏 (コジュケイ) を持ち渡る (長崎渡来鳥獣図巻)。
- 文化3 1806 ●4・12, 栗本丹洲が江戸城で「唐かけす」(カケス) を写生 (堀田禽譜)。
- 6・22/6・27, 蘭船, ヒクイドリと風鳥の剥製を持ち渡る (水谷禽譜)。この風鳥はシロカザリフウチョウ (渡辺派鳥類図巻)。
- 文化4 1807 ●6・18/6・26, 蘭船がシルバールトン (オナガザル類) を将来 (唐蘭船)。
- 11・1, 大田南畝, 姫路侯の江戸屋敷で火食鳥を見る (一話一言17)。

- 文化5 1808 ●夏、佐藤成裕が『飼籠鳥』の自序を記す。全416品のうち約100品が唐鳥。
●清船が百霊鳥（コウテンシ＝告天子）を持ち渡る（長崎渡来鳥獣図巻）。
- 文化6 1809 ●6・18、蘭船が類人猿のワウワウテナガザルを将来（唐蘭船）。→本年10月
●7月、名古屋大須で、白牛・青インコ・紫インコ（大紫）・あふむ鳥（鸚鵡）の見世物（猿猴庵文化日記）。
●10月頃、大坂で「猿」（ワウワウテナガザル）の見世物（摂津名所図会大成）が出る。11月には和歌山へ移り、一里山庚申堂境内で見世物（桃洞遺筆4）。
●清船、蝟（ハリネズミ）を持ち渡る（唐蘭船）。→1735, 1811
- 文化7 1810 ●4月、名古屋でワウワウテナガザルの見世物（猿猴庵文化日記）。→前年
- 文化8 1811 ●5・3、栗本丹洲、蘭人持ち渡りの紅風鳥剥製を観る。記述からヒヨクドリ（比翼鳥）らしい（磯野2000）。→1697
●ハリネズミ、江戸へ送る途中で死ぬ（磯野2000）。→1809
- 文化9 1812 ●7月、清船、砂糖鳥4羽を持ち渡る。本年4月にも同品が来た（唐蘭船）。
●12月、清船、沈香鳥（ギンパラ）2羽を持ち渡る（唐蘭船）。→1787
- 文化10 1813 ●6・28、長崎にイギリス船が入港、象（インドゾウ、牝5歳）・山猫（マレージャコウネコ）・大紫音呼（オオハナインコ）雌・狸々音呼（ヒインコ）・五色音呼（オトメズグロインコ）を持ち渡る（唐蘭船）。『豊芥子日記』には、紅雀3・千鳥1・長生鳩3・緋音呼4・青音呼1・鸚鵡4・山猫1・猿1・象1・ケレツフハーン（ヒメウズラ）1を積載とある。日本側は象を受け取らずに返した（蘭館日記）が、図はかなりの数が残っている。[注19]
●8・16、清船、狸々音呼（ルイチガイシヨウジョウインコ）と青海音呼（ズグロゴシキセイガイインコ）を持ち渡る（唐蘭船）。
- 文化11 1814 ●6・23、イギリス船が、麝香猫（ジャワジャコウネコ）・錦鳩（キンバト）・五色紅音呼（アカクサインコ）・鸚鵡（コバタン）を持ち渡る（唐蘭船）。
- 文化12 1815 ●9月、名古屋大須で「寒号虫」の芸を見せる（猿猴庵文化日記）。寒号虫は南西諸島に産する八重山蝙蝠（クビワオオコウモリ）らしい。→1642
●12・27、下田に漂着した清船は、沈香鳥（ギンパラ？）42羽・倒掛鳥（サトウチョウ）5羽・相思鳥（ソウシチョウ）17羽を積んでいた（清船筆話）。
●清船が紅音呼（ルイチガイシヨウジョウインコ）2羽を将来する（唐蘭船）。
- 文化13 1816 ●春、江戸で山猫の見世物。文化10年渡来のマレージャコウネコ（本草図説）。
●11月、名古屋で麝香猫の見世物（猿猴庵文化日記）。前項と同じ見世物か。
●清船、鸚鵡（コバタン）と洋八歌（ギンムクドリ）を持ち渡る（唐蘭船）。
- 文化14 1817 ●6月、『奇鳥生写図』の本月写し終わった部分に、珊瑚鳥（タイカンチョウ＝大官鳥）の図がある。
●清船、青音呼（キボウシインコ）を持ち渡る（唐蘭船）。
●幕医渋江長伯の建言で、幕府は長崎奉行に命じて清から綿羊を取り寄せ、長

- 伯が管轄していた巢鴨御薬園で飼育する。のち、300余頭に増え、年々剪毛して浜御殿御薬園や吹上御殿で絨布を織らせた（宗田1992）。
- 文政1 1818 ●清船，紅音呼（ヤクシャインコ）・紅音呼（ルイチガイショウジョウインコ）・黄鳥（コウライウグイス）・檀香鳥（シマノジコ）・十姉妹（シマキンバラ）を持ち渡る（唐蘭船）。
- 文政2 1819 ●6・11／6・26，蘭船がボルボラアト鳥（ホロホロチョウ）3とスマトラ産尾長猿（シルバールトンか）8を持ち渡る（唐蘭船，博物館獣譜）。[注20]
●清船，綬雀（コシジロミツスイ）・認宅鳥（アトリ）を将来する（唐蘭船）。
- 文政3 1820 ●6・15，蘭船がペンギンの皮を持参（蘭畹摘芳筆録本3編8）。→1735
●6月，清船，四祝鳥（シキチョウ）と翠花鳥（ミナミヤイロチョウ）を持ち渡る（唐蘭船）。
●清船，小形類違紅音呼（アオスジヒインコ）・類違紅音呼（ヤクシャインコ）を持ち渡る（唐蘭船）。
- 文政4 1821 ●7・1，蘭船が献上品として駱駝（ヒトコブラクダ）牝牡を持参したが，幕府は受け取らず，文政6年2月まで出島に置かれた（唐蘭船，長崎志統編）。
●8・26，尾張の大須で唐鳥の見世物が始まる。「鉄はら青いんこ尾長・朱はし[嘴]だるまいんこ・獅子いんこ・頭黒五色いんこ・キウクワン鳥[九官鳥]・五色いんこ・朱はし青いんこ・わび鳥[画眉鳥?］・かささぎ・こんよふ鳥[紺瑤禽=ルリカケスカ]・ヲランダ白狸[?］と豪華な顔ぶれだった（見世物雑誌）。しかし，図も無く，大半は種類が特定できない。
- 文政5 1822 ●6・12，蘭船，ボルボラアト鳥（ホロホロチョウ）雌雄を将来（唐蘭船）。『長崎渡来鳥獣図巻』に「卵……大概二十八日程には産し候。則三ヶ月程，相立候略図」の注記付きの雛鳥図があるので，繁殖にも成功していた。→1819
●6・16，清船，山鵲（サンジャク）と黄鳥（コウライウグイス）を持ち渡る（渡辺派鳥類図巻）。
●10月，箱館亀田村の近く一本木の古堀で，カンムリツクシガモ雌雄を捕獲，翌年秋に將軍家に献上（堀田禽譜，水禽譜）。
- 文政6 1823 ●2月，文政4年渡来の一トコブラクダが民間に引き渡され（長崎志統編），まず九州・四国で興行し，7月には大坂で見世物となる（見世物研究）。
●3月，大坂難波新地で，黒猿の見世物（摂陽奇観）。文政2年渡来の猿か。
●7・12，大坂難波新地で，ラクダの見世物が始まる。しかし，札銭24文が高かったからか，意外に不入りで，9月には京都に移る（摂陽奇観）。
●9・19，京都上京四条道場でラクダの興行開始。ついで奈良へ（摂陽奇観）。
●11・14，尾張大須門前で，黒猿の見世物（猿猴庵文政日記）。同時に赤いんこ・青いんこ・紺瑤禽も出る（見世物雑誌）。→本年3月
- 文政7 1824 ●春，駱駝が南紀で興行（摂陽奇観）。ついで木曾路を経て江戸へ。

- ⑧・6, ヒトコブラクダ牡牝, 江戸に到着し, 同月9日から両国広小路で興行を始める。32文の札銭にもかかわらず, 連日観客が殺到し, 興行は日延べに日延べを重ねて, 翌春まで続く(我衣18, 見世物研究)。
- 文政8 1825 ●7・2/7・7, 蘭船がヒクイドリを将来(唐蘭船)。
- 文政9 1826 ●3月下旬, 筑前の見世物に出た「虎の子」は山猫(山猫図説)。図と計測値から判断すると, ツシマヤマネコと思われる。
- 10月, 陸亀(セマルハコガメ)を清の福州から琉球へ持ち渡る(本草図説)。
- 11・11, 尾張の大須でラクダの見世物が始まる。前年春に江戸の興行を終えた後, 東国・越前・加賀などを廻り, 本年岐阜を経て尾張に入る。尾張の後は三河・遠江で興行(絵本駱駝具誌, 猿猴庵文政日記)。
- 清船, 寿鷄鳥(ベニジュケイ)雄1羽と黄頭青音呼(オオキボウシインコ)を持ち渡る。翠花鳥(ヤイロチョウ)の清船持ち込みも本年らしい(唐蘭船)。
- 文政10 1827 ●4月, 岩国にラクダが来る(岩国市史)。
- 5月, ラクダ牡牝, 大坂難波で見世物。ついで北国に向かうが, この後天保4年(1833)までの足跡は不明(撰陽奇観, 見世物研究)。
- 12月, 朝鮮より対馬経由で豹の子牝2頭が長崎に来て, 翌年見世物となる(唐蘭船, 柳庵随筆7)。
- 清船, 紅音呼(コムラサキインコ)を将来(唐蘭船)。
- 文政11 1828 ●5月, 筑後の柳川で, 豹の見世物(博物館獣譜)。→前年12月, 本年12月
- 6・26, 蘭船が碧鳥(ヘキチョウ)を持ち渡る(唐蘭船)。
- 12・11, 豹1頭, 平戸へ来る。本年, 2頭が筑州・肥州・長崎と興行したのち, 加島で1頭が死に, 一度対馬に戻ってから, 平戸へ再来して興行。ついで小倉へ向かったという(甲子夜話続編22)。
- 文政12 1829 ●清船, 類達碧鳥(コウラウン)を持ち渡る(唐蘭船)。
- 天保1 1830 ●春, 鳥屋の越前屋彦四郎が西尾侯に, 翻麗鳥を持参(堀田禽譜)。『日本鳥名由来辞典』はアカメカラスモドキ, 『江戸鳥類大図鑑』はオオルリチョウと同一している。
- 4・8, 本日より尾張大須の清寿院で, 豹の見世物。この前に京都・大坂でも興行したらしい。6月に伊勢に行くが, 7月に松坂で人に噛み付き, 殺された(見世物雑誌, 桃洞遺筆6)。文政11年に平戸へ再来した豹と思われる。
- 6・20, 蘭船がピルポタート(コモンシャコ雌)を持ち渡るが, 数日後に死ぬ(唐蘭船)。
- 天保2 1831 ●6・29, 蘭一番船が麝香猫(マレージャコウネコ)牡1・小形青音呼5を将来。6・30, 蘭二番船が小形鸚鵡1・長生鳩8・弁柄鳩3を将来(唐蘭船, 成澤1993B)。
- 夏, 長崎に虎2頭が来るが, 受け取らず(物産宝庫乙1)。

- 12月, 堀田正敦著の通称『堀田禽譜』が完成(長岡・田中1994)。本書は江戸時代最大最高の鳥類図説であり, 多数の渡来種も載せる。本年表既出品以外に, リュウキュウガモ・カンムリヒバリ・ヒメコウテンシ・ヒゲガラ・ソデグロムクドリ・クリチャヒワ(かあぶす鳥)・コシジロヒヨドリ・ベニバト・レンジャクバト・オナガバト・タイハクオウム・オオバタン(オウム類)・ズグロインコ・ショウジョウインコ・ルイチガイヒインコなどがある。
- 天保3 1832 ●7・20, 蘭船が山あらし(ジャワヤマアラシ)・類違音呼(ヨウム)・コロホーゲル(カンムリバト)を持ち渡る(唐蘭船)。
- 8月, 尾張藩で, 綿羊を希望者に与えると通達(名陽見聞図会初編下)。
- 天保4 1833 ●3月, 大坂難波新地でヤマアラシの見世物(摂陽奇観)。前年渡来の個体か。
- 春末, 江戸両国広小路で, ラクダ1頭の見世物(文政10年5月以降の足取りは不明)。5・3から7日間は信州飯田の専照寺で興行, 6・1には甲州路をまた江戸に向かい, 8月に江戸市谷八幡で見世物となった(巷街贅説)。「牝尾張にて死す。牡浪花難波村に両三年居けるが, 是も死せり」(鍾奇遺筆1)というから, 本項のラクダは生き残りの牡だが, 以後の消息は伝わらない。
- 6・6, 蘭船が, 小形鹿(ジャワマメジカ)1頭・ロイアールト(原猿のスローロリス)1匹・ランベケンデテイル(ハクビシン)1匹を持ち渡る(唐蘭船)。『甲子夜話』続編97によると, 以上のほかにも, 麝香猫5匹・音呼10羽・十姉妹6籠・鳩2籠・エイキホールン(リス類)1匹・黒猿2匹・鸚鵡8羽・文鳥4籠・猿6匹・九官の類, と多様多数の動物が持ち込まれた。また, 年不明だが, 鹿の一種キョンもこの前後に将来されたい(唐蘭船)。
- 天保5 1834 ●5・13, 尾張大須山門外で, 豪猪(ヤマアラシ)・秦吉了(キュウカンチョウ)・鸚鵡の見世物(見世物雑誌)。豪猪は前々年渡来の個体か。
- 7・1, 蘭船, テンボンチイ(ミフウズラ)雌と類違大鼻音呼(オオハナインコモドキ)を持ち渡る(唐蘭船)。麝香猫も来たらしい(甲子夜話3編12)。
- 天保6 1835 ●6・28, 蘭船, コロブレチース鳥(キンカチョウ)を持ち渡る(唐蘭船)。
- 天保7 1836 ●5月, 江戸浅草奥山で, 朝鮮渡りのロバの見世物(白井年表)。
- 6・12, 蘭船, ヒクイドリを将来(見世物雑誌)。
- 次年, 1838・2月・6月
- 長崎御用物役高木作右衛門忠篤, 八哥鳥(ハッカチョウ)2羽・赤い嘴の倒臥鳥(シュバシサトウチョウ)5対を蘭館に注文。忠篤は天保6年にも倒臥鳥(サトウチョウ)10対を注文している(大森1976)。
- 天保8 1837 ●9月, ヒクイドリ, 尾張で見世物に出る。前年渡来の個体(見世物雑誌)。
- 11月, 長崎奉行戸川播磨守安清, 長崎より江戸にカイマン(ワニ)の乾燥標本2体を持参。大は2丈, 小は2尺ほど。ほかに「レギユア、ン」という黄縞のあるトカゲ(生品?, 乾品?)も持ち帰る(鳥獸図)。
- 清船, 類違音呼(キムネゴシキセイガイインコ=黄胸五色青海インコ)と類

- 違音呼（アオスジヒインコ＝青筋緋インコ）を持ち渡る。値は前者が銀800目、後者は銀1貫500目で、幕府はともに不要と返答（唐蘭船）。
- 天保9 1838 ●2月、江戸西両国で駝鳥（ヒクイドリ）の見世物（見世物研究姉妹編・見世物版画年表）。→1836, 1837, 本年6月, 1840
●6月、京都京極でヒクイドリの見世物（錦窠禽譜22, 百品考2下）。
- 天保10 1839 ●6・24, 蘭船, 紅雀（ベニスズメ）雄5・雌3を持ち渡る（唐蘭船）。
●冬, 清船, 和春鳥（クロウタドリ＝黒歌鳥）を将来（長崎渡来鳥獣図巻）。
- 天保11 1840 ●秋, 京都京極の善良寺でヒクイドリの見世物（重修本草綱目啓蒙・増補）。
- 天保12 1841 ●3・28, 江戸浅草寺で観世音の開帳が始まり, 境内奥山でのロバの見世物が当たりとなる（武江年表, 見世物研究）。
- 天保14 1843 ●7・9, 蘭船, モルモット 牝を持ち渡る（唐蘭船）。牝は長崎で死ぬが, 牝は幕府御用となって, 9・26に長崎を出発し, 江戸に向かう（唐蘭船, 続泰平年表, 百品考2下）。三毛の愛玩用品種だったので人気があったらしく, 翌年も将来されて江戸城御用となる。→次項
- 弘化1 1844 ●6・16, 蘭船がモルモットを持ち渡る。12月, モルモット2対が江戸城に到着。道中で牝2匹とも出産したが, 親子とも健在（朝暎聞見1）。子は計12匹（紫藤園獣譜）。11・23, 1匹を払下げるとの触れが出る（天保雑記）。→前項
●清船, 寿鳥（ベニジュケイ）雄を持ち渡る（唐蘭船）。
- 弘化3 1846 ●4月, 大坂難波新地観場で「虎ノ子・灰白鸚鵡 [ヨウム?]・猩々音呼ノ頭黒キモノ [ズグロインコの類?]・相思鳥・砂糖鳥」の見世物（随意雑識4）。虎ノ子は山猫（ツシマヤマネコ?）かもしれない。→1826, 1851
●清船, 七星魚（タイワンドジョウ）を持ち渡る（唐蘭船）。
- 弘化4 1847 ●4・1, 京都の山本読書室に文鳥の「雄」が飛来, 1月後には「雌」も来る（百品考2下・瑞紅鳥）。外国産の鳥がすでに野生化していた事例の一つ。
●清船, 小紫音呼（ヤクシャインコ）を持ち渡る（唐蘭船）。
- 嘉永1 1848 ●清船, 嶋鶯（クロヒヨドリのシマヒヨドリ型）1羽を持ち渡る（唐蘭船）。
→次項, 次々項, 注4
- 嘉永2 1849 ●清船, 珊瑚鳥（ムジチメドリ）と嶋鶯各1羽を持ち渡る（唐蘭船）。
- 嘉永3 1850 ●7月, 清船, 洋八歌鳥（ギンムクドリ）と黄鳥（コウライウグイス）を持ち渡る。本年はこのほか, 嶋鶯5羽（クロヒヨドリ型4, シマヒヨドリ型1）が来た（唐蘭船）。[注4]
- 嘉永4 1851 ●10・9, 本日より, 江戸西両国広小路で生虎の見世物。じつは対馬深山で捕らえた山猫というから, ツシマヤマネコか（藤岡屋日記・珍説）。
- 嘉永5 1852 ●1月, 清船が紅通鳥（ダルマエナガ）1羽を持ち渡る（唐蘭船）。
- 万延1 1860 ●7・11, 「豹, 渡来。吹上に於て [将軍] 御覧あり」, 体長4尺余, 9カ月の子。同月下旬から, 両国橋西詰で見世物（武江年表）。開国により, 以後いる

- いろな動物が到来し、見世物に出る。
- 12・17, 本日, 博物画家関根雲停が川村壱岐守の庭園で朝鮮ヲシドリ, 一名 リキウカモ (カンムリツクシガモ) を写生 (博物館禽譜)。→1724, 1868
- 文久1 1861 ●6・16, 関根雲停が「亜墨利加産ハルミ・桐花鳳」(ハチドリ類) を写生 (博物館禽譜)。剥製か。
- 10・14, 本日より江戸麹町13丁目裏の福寿院境内で虎の見世物。秋に渡来した個体で、体長は5尺余。その後、橋場 (現白鬚橋辺) に移る (武江年表)。
- 文久2 1862 ●3・27, 領土権確立と開拓のため前年12月に小笠原諸島へ渡った幕府派遣隊の一部が、この日、オガサワラオオコウモリ (小笠原大蝙蝠, 母島で捕獲) を携えて江戸に戻る (磯野1994)。
- 春, 大坂難波新地で、豹の見世物。万延元年7月に江戸で興行を始めてから何処を廻ったかは不明 (見世物研究)。
- 伊勢松坂竜泉寺で、虎の見世物 (本草写生図譜)。前年秋渡来の虎か。
- 文久3 1863 ●1・2, 本日より、江戸両国橋西詰でフタコブラクダの見世物 (磯野1995)。4月には浅草奥山で見せる (見世物研究)。
- 春, インドゾウ牝1頭 (3歳) が横浜に渡来, 3月上旬から江戸両国広小路で見世物, 大当たり (歌川芳豊錦絵ほか)。
- 元治1 1864 ●6・20, 出羽松山藩家老の松森胤保が江戸浅草奥山の鳥屋を訪れ、ハッカんとカササギを売っていたと記す。7・10に同店を再訪したところ、チョウショウバト・キンケイ・クジャク・オウム・青インコ・朝鮮目白がいた。別の鳥屋では、ベニスズメ・ジュウシマツ・ブンチョウ・コウライキジ・尾長インコ・シチメンチョウ、小笠原産と称する大蝙蝠などを見かけている (遊覧記)。
- 9・18, 松森胤保, 江戸向島の牛島神社辺で虎の見世物を見る (遊覧記)。文久元年に渡来した虎が各地を廻ったのち江戸に再来したらしい。
- 慶応1 1865 ●1・18, 松森胤保, 江戸浅草奥山の鳥屋を再訪, 新たにアカヒゲ・ガチョウ・銀鳩 (ジュズカケバトの白変)・孔雀鳩がいた。5・15, 江戸を離れた日の夜に野田 (現さいたま市・野田) で一泊した際、シラコバトが一晩中やかましいと記す (遊覧記)。現在も越谷付近にはシラコバトが生息し、江戸時代に輸入され、鷹の獲物として放鳥されたものの子孫といわれる。
- 4月, 伊勢国古市 (伊勢市の東南) で象の見世物 (本草写生図譜)。ただし、5月14日, 神域であることを理由に禁止された (維新史料綱要)。
- 8・3, 『慶応漫録』本日条に、最近 ライオン が持ち渡られ、横浜居留地に飼われていると記す。『枳園叢攷』9・16日条によると、これは牝で体長4尺ほど。前日江戸へ運ばれ、16日には浅草金龍山で見世物に出たが、仏域で肉餌を与えるのは許せないとして翌17日には禁止された。→次項
- 慶応2 1866 ●1月, 江戸芝白金の清正公廟前でライオン牝の見世物 (白井年表)。→前項

- 4月, 大坂難波で象の見世物 (本草写生図譜)。→1863, 1865
- 慶応3 1867 ● 3月, 大坂難波新地でフタコブラクダの見世物 (本草写生図譜)。→1863
- 6・26, ナポレオン3世より贈呈されたアラビア馬26頭 (牡11, 牝15) を, 江戸城で受領 (馬事年史)。
- 10月, パリ万国博覧会に出席していた田中芳男が帰国, ホロホロチョウを持ち帰る (田中芳男君の経歴談)。→1819, 1822
- 明治1 1868 ● 12・19, 出羽松山藩家老松森胤保 (→1864) の『日記』本日条によれば, 江戸浅草奥山の鳥屋を覗くと, 数年前 (→1864, 1865) には見かけなかった新顔に, 「金鳩・頭黒^{スグロ}インコ・緋インコ・画眉鳥・タイコン鳥 [タイカンチョウ]・白頭^{シロゴシラ}・相思鳥・沙糖鳥 [サトウチョウ]」と, 見慣れない鴨がいた。翌明治2年4月, この鳥屋を再訪すると, その鴨がいたので名を尋ねると「リキウ^{カモ}鳥」とのこと (→1860)。胤保は, この鴨を写生して自著『大泉諸鳥写真画譜附録』に残したが, これはカンムリツクシガモであり, 現在では絶滅した本種が市販もされていたことを示す唯一の記録である。→1724 [注21]

注記

- (1) 絵図から判断すると, 幕末までに日本へ持ち込まれた孔雀の大半はマクジャクである (日本鳥名由来辞典)。
- (2) 正倉院御物に描かれているのはフタコブラクダだが, 中国で出土した唐三彩の陶俑にはヒトコブラクダが見られる。したがって, 図や詳しい記述が無い場合には, そのいずれかは決められない。
- (3) 古代から15世紀頃までは, 「鸚鵡」のうちにインコも含んでいた可能性が大きい。
- (4) 嶋鴨は現種名クロヒヨドリ。本種には頭の黒いクロヒヨドリ型と, 頭の白いシマヒヨドリ型があるが, 図あるいは詳しい記述がないと, どちらか特定しがたい。したがって, 特定できる場合はいずれの型かを記し, それ以外は単に「嶋鴨」とした。
- (5) 「天正2年 (1574), 明船が博多に来て, 象・虎を持ち渡る」と記す書があるが, その出典は不明である。内容が本項の記事とよく似るので, その誤伝と思われる。
- (6) 『日葡辞書』に「Yaguiu: 野ノ牛 (Nono vxi), 牡山羊または牝山羊」とあるのはヤギである。当時の日本では, なぜかヤギに「野牛」の語を充て, 音読みで「ヤギユウ」と発音したらしい。その「ヤギユウ」が訛って「ヤギ」となった。
- (7) 江戸時代の「駝鳥」は, 万治元年 (1658) の1例を除いてダチョウではなく, みなヒクイドリだった。この間違いは『本草綱目』の誤りに由来する。
- (8) このダチョウの図が高知市山内神社に残る。また, ダチョウの現蘭名はstruis-vogelだが, 当時はvogelstruisとも呼び, それが「ほうよろすとれいす」となった (松田1987)。
- (9) 狩野常信は幕府御用絵師, 江戸木挽町狩野家2世。その『鳥写生図巻』(東京国立博物館蔵) は寛文4年 (1664) から正徳2年 (1712) にわたる鳥類のスケッチを収め, 江戸城

- や幕府関係者宅で飼われていた鳥が多い(磯野2003)。
- (10) 現在の小笠原諸島にはセイケイは生息していないが、漂流者や延宝3年の探査記録から、当時セイケイの類がいたことは確実である(磯野1997, 鈴木2002~04)。
- (11) 長崎の高木家は、寛文2年(1662)に3代作右衛門宗能のとき御用物役になり、清船・蘭船が持ち渡った物品や鳥獣を管理し、また図を含めた詳細を幕府に通報することになる。元文4年(1739)以降は代官も兼ね、幕末にいたる。代々、作右衛門を名乗る。
- (12) 現在の十姉妹(ジュウシマツ)は、コシジロキンバラから江戸時代の日本で作られたが、当時の十姉妹図を見るとジュウシマツ・ダンドク(コシジロキンバラの一亜種)・シマキンバラなどの場合がある。したがって、特定できる場合以外は原記載名「十姉妹」だけを記した。なお、「十姉妹」の語は、中国に由来するようである。
- (13) 竹鶏は図や記載からコジュケイの場合が多いが、なかに別種の例も存在する。したがって、図や詳細な記載を欠く場合はコジュケイとせず、原記載の「竹鶏」のままにした。
- (14) 象の行程は一部しか判明していない：3・13長崎発、14矢上泊……21下関……4・6広島通過……18兵庫泊、19尾崎泊、20大坂着、24大坂発・枚方泊、25伏見泊、26京都着、28天皇・法皇に拝謁、29京都発・草津泊……5・4清須泊、5名古屋通過……14箱根着(箱根は3日間逗留の予定だったが、発病して出発延期)、19箱根発……23川崎泊、24品川泊、25江戸着(山下1972, 吉長公御代記, 月堂見聞集, 金府紀較抄, 御用象御賄諸入用小帳, 大田区史資料編・平川家文書1)。
- (15) インコに関しては、赤っぽい種類は「紅音呼」、多色ならば「五色音呼」……のように大雑把に呼ばれていたから、本稿では図を伴う場合を除き、原記載名だけを記した。
- (16) 江戸時代に持ち込まれたと判明している風鳥(剥製)は、オオフウチョウ、コフウチョウ、カンザシフウチョウ、シロカザリフウチョウ、ヒヨクドリ(日本鳥名由来辞典, 江戸鳥類大図鑑, 内田康夫氏私信)。
- (17) 「かあぶすかなありや」を『日本鳥名由来辞典』はキマユカナリア、『江戸鳥類大図鑑』はオオカナリアとする。いずれにしてもカナリアに近い種類。
- (18) 『鳥賞案子』^{ちやうしようあんし}は異題が多く、鳥養草・鳥名集・鳥はかせ・飼鳥必用・養禽物語など、全部で10以上の異名同本があるので、注意を要する。→磯野(1992)
- (19) ナポレオン戦争のため、1810年にオランダはフランス領となる。1811年にはイギリスがジャワを占領、ついで長崎の蘭館奪取を意図してイギリス船が文化10年(1813)と次年に派遣されたのである。ジャワがオランダに返還されたのは、講和成立後の1816年。
- (20) 『博物館図譜』にある文政2年渡来のシルバールトン図は、『唐蘭船持渡鳥獣之図』中の文化4年渡来のシルバールトン図と瓜二つである。じつは、大名などから長崎に問い合わせがあった場合、かならずしも実物の絵を送るのではなく、すでに描かれている絵を写して使うこともあったらしい。たとえば、『甲子夜話』3編12巻にある「天保五年渡来麝香猫図」は、著者平戸藩主松浦静山が長崎から取り寄せたらしいが、これは『唐蘭船持渡鳥獣之図』にある寛政6年渡来の麝香猫図の転写図である。前記文政2年渡来シル

パールトン図もこのような転写図と思われる。

- (21) 松森胤保の「日記」(松森家蔵)から、カンムリツクシガモに関連する部分を採録——
 明治元年(1868)「十二月十九日 屋より出、浅草奥山鳥屋_江行て見に、一体鳥数は不足
 なれども、色々珍鳥あり。人もなく静なれば、図を取、金巻朱呉て帰。其数、左の如
 し——高麗雉 別品小雉 金鳩 頭黒インコ [空白] 鴨 緋インコ 画眉鳥_{マミジロ} 眉白
 タイコン鳥 コク丸鳥_{シロガシラ} 白頭 相思鳥 鳴類白 沙糖鳥 等の類也」(下略)
 明治2年(1869)「四月十二日 …… 奥山_江参……鳥屋に行けれども、別物なし。おし
 [オシドリ]_{おおきな}の大成よふなる_{カモ}梟 [カンムリツクシガモ] はりキウ梟といへり」

文献：略号で示した文献、絵画資料、明治以降の出版物・報文を中心とし、『国書総目録』『国
 史大辞典』『国文学複製翻刻書目総覧』などで所在や、翻刻本・影印本を調べられる資
 料の大半は省略した。略称を用いた資料は➡の後に正式名を記した。⇨は「次書に所
 収」の意、「:」の後は関連文献などを記した。「東博」は東京国立博物館の略、「日吉
 紀要」は『慶應義塾大学日吉紀要・自然科学』の略。なお、国会図書館蔵鳥類書の大部
 分は磯野(1992)に概略を記してある。

愛禽徒然草、瑞翁、国会図書館蔵：磯野(2001)参照

維新史料綱要、維新史料編纂会編

伊豆大島志考、立木猛治、同刊行会

英館日記➡イギリス商館長日記、東大資料編纂所編・発行

江戸鳥類大図鑑、鈴木道男編著、平凡社：『堀田禽譜』『観文禽譜』に基く

絵本駱駝具誌、高力猿猴庵、神戸市立博物館蔵

猿猴庵文化日記、高力猿猴庵 ⇨ 日本庶民生活史料集成9、三一書房

猿猴庵文政日記、高力猿猴庵 ⇨ 日本都市生活史料集成4、学習研究社

大泉諸鳥写真画譜附録、松森胤保、松森家蔵：磯野・内田(1989)を参照

屋漏堂禽譜、坂 元慎 ⇨ 屋漏堂花譜、坂 元慎、岩瀬文庫蔵

お湯殿➡お湯殿の上の日記、続群書類従、補遺3、続群書類従完成会

阿蘭陀人日本渡海発端 ⇨ 続海事史料叢書、第1巻、成山堂書店

外国産鳥之図、国会図書館蔵：磯野・内田(1992)を参照

華蛮交易治聞記、東京大学総合図書館蔵

寛政元酉歳紅毛直組帳、神戸市立博物館蔵：磯野・内田(1992)に収録

観文禽譜、堀田正敦、東博・国会図書館など蔵：図ナシ。『江戸鳥類大図鑑』を参照

枳園叢攷、森 立之、国会図書館蔵

帰山録草稿、三浦梅園 ⇨ 三浦梅園集、岩波文庫

九淵遺珠、丹羽正伯、杏雨書屋・岩瀬文庫蔵：磯野直秀、『九淵遺珠』、日吉紀要、17号

享保日記、西野清八郎 ⇨ 随筆百花苑15、中央公論社

近世風俗図譜 5：四条河原，小学館

御用象御賄諸入用帳，箱根町立郷土資料館蔵

昆虫胥化図，細川重賢，永青文庫蔵：小西（1993，1994）を参照

左大史孝亮記 ⇨ 改定史籍集覧，第25冊，臨川書店

佐竹曙山写生帖 ⇨ 佐竹曙山・増山雪斎（江戸名作画帖全集 8：博物画譜），駸々堂

薩摩博物学史，上野益三，島津出版会

実紀→徳川実紀，新訂増補国史大系，吉川弘文館

衆鱗図，松平頼恭編，松平公益会蔵・香川県歴史博物館保管：影印本→香川県歴史博物館友の会／東海大学出版会（内容は同一）

承寛襍録→諸留書，内閣文庫蔵

書紀→日本書紀，新訂増補国史大系，吉川弘文館

白井年表→[改訂増補]日本博物学年表，白井光太郎，大岡山書店

資料日本動物史，梶島孝雄，八坂書房：事例や出典を知るのに役立つ

随意雑識，岩永文禎，杏雨書屋蔵

水禽譜，著編者未詳，国会図書館蔵

大雲院公実録 ⇨ 宗氏実録 2，清文堂出版

田中芳男君の経歴談 ⇨ 東京国立博物館百年史・資料編，東京国立博物館編刊

田村公用日記→田村藍水・西湖公用日記，統群書類従完成会

鳥獸図，著編者未詳，東博蔵

鳥巢獸類魚品石貝之写生，栗本丹洲，杏雨書屋蔵

朝暎聞見，貴志忠美，岩瀬文庫蔵

鳥類絵，著者未詳，長崎県立図書館蔵：渡来鳥類の図譜，長崎御用絵師の控図？

東夷物産志稿，土岐新甫？ ⇨ 採葉志 - 1，科学書院

唐蘭船→唐蘭船持渡鳥獸之図，慶應義塾図書館蔵：磯野・内田（1992）参照

鳥写生図巻，狩野常信画，東博蔵：磯野（2003）を参照

長崎表御用会計私記，大田南畝 ⇨ 大田南畝全集17，岩波書店

長崎県史・史料編 2，吉川弘文館

長崎志・同統編→長崎実録大成・統長崎実録大成（長崎文献叢書 2，4），長崎文献社

長崎渡来鳥獸図巻，東博蔵

長崎洋学史，古賀十二郎，長崎文献社

長崎略史，金井俊行 ⇨ 長崎叢書・下，長崎市役所

日葡辞書→邦訳日葡辞書，土井忠生ほか編訳／索引日葡辞書索引，森田 武，岩波書店

日本王国記，アビラ・ヒロン，大航海時代叢書11，岩波書店

日本鳥名由来辞典，菅原 浩・柿澤亮三，柏書房

日本の金魚，松井佳一，アルス文化叢書37，アルス

博物館禽譜，博物局編，東博蔵：磯野直秀，東京国立博物館『博物館図譜』について，日吉紀

要, 12号

博物館獣譜, 博物局編, 東博蔵: 前項磯野報文を参照

馬事年史, 大友源九郎, 日本競馬会

物産宝庫・乙集, 田中芳男, 東京大学総合図書館蔵

芳齋禽譜摘要, 著者未詳, 東洋文庫

堀田禽譜(通称)→禽譜, 堀田正敦, 東博・宮城県図書館蔵: 図説。長岡・田中(1994)および『江戸鳥類大図鑑』を参照

本草写生図譜, 山本溪愚, 雄渾社

本草図説, 高木春山, 岩瀬文庫蔵: 『本草図説』(リプロポート)を参照

本草余纂, 小原桃洞, 杏雨書屋蔵: 該当箇所は獣部の「鮓答」の項

水谷禽譜, 水谷豊文, 国会図書館ほか蔵: 『豊文禽譜』『水谷氏禽譜』も同本

見世物研究, 朝倉無声, 思文閣出版: ちくま学芸文庫版もある

見世物研究姉妹編, 朝倉無声, 平凡社

見世物雑誌, 小寺玉晁, 三一書房

名陽見聞図会, 歌月庵喜笑, 美術文化史協会

百千鳥→[唐鳥秘伝]百千鳥, 城西山人, 国会図書館蔵: 刊本

山猫図説, 桂川国寧⇔桂川の人々・続編, 今泉源吉, 篠崎書林

遊覧記, 松森胤保, 松森家蔵: 磯野・内田(1989)を参照

羅葡日辞典→ラホ日辞典の日本語: 索引編, 金沢大学法文学部国文学研究室編, ラホ日辞典索引刊行会

蘭畹摘芳筆録本, 東博蔵: 刊本『蘭畹摘芳』はそのほんの一部に過ぎない

蘭館日記→平戸オランダ商館の日記(永積洋子訳, 岩波書店: 1627~41を所収), 長崎オランダ商館長日記(東大資料編纂所編・発行: 1633~47), 長崎オランダ商館の日記(村上直次郎訳, 岩波書店: 1641~54), 長崎オランダ商館日記(雄松堂出版: 1801~23)

蘭山禽譜, 小野蘭山, 国会図書館蔵

若松興行見聞→旧若松大角力芝居其他興行見聞留書⇔日本庶民生活史料集成6, 三一書房和漢寄文⇔享保時代の日中関係資料1, 関西大学出版部

渡辺派鳥類図巻, 神戸市立博物館蔵: 唐絵目利渡辺家蔵控図, 成澤(1993A)参照

磯野直秀(1992), 江戸時代の禽類図譜と養禽書, 日吉紀要, 11号

磯野直秀(1993), 明治前鳥獣渡来年表, 日吉紀要, 13号

磯野直秀(1994), 日本博物学史覚え書2, 日吉紀要, 16号: 該当するのは第2節

磯野直秀(1995), 田中芳男の貼り交ぜ帖と雑録集, 日吉紀要, 18号

磯野直秀(1997), 日本博物学史覚え書5, 日吉紀要, 22号: 該当するのは第1節, 第4節

磯野直秀(1998), 日本博物学史覚え書6, 日吉紀要, 24号: 該当するのは第6節

磯野直秀(2000), 日本博物学史覚え書9, 日吉紀要, 28号: 該当するのは第10節

- 磯野直秀 (2001), 日本博物学史覚え書10, 日吉紀要, 29号: 該当するのは第5節
- 磯野直秀 (2002), 日本博物誌年表, 平凡社
- 磯野直秀 (2003), 博物誌資料としての『鳥写生図巻』, MUSEUM (東京国立博物館研究誌), 584号
- 磯野直秀 (2005), 珍禽異獣奇魚の古記録, 日吉紀要, 37号
- 磯野直秀 (2006), 博物誌資料としての『お湯殿の上の日記』, 日吉紀要, 40号
- 磯野直秀・内田康夫 (1989), 『遊覧記』に見られる江戸の鳥類, 日吉紀要, 7号
- 磯野直秀・内田康夫 (1992), 『舶来鳥獣図誌』, 八坂書房: 『唐蘭船持渡鳥獣之図』と『外国産鳥之図』のほぼ全図を収録し, 解説を加えた
- 岩生成一 (1980), 明治以前洋馬の輸入と増殖, 吉川弘文館
- 上野益三 (1989), 『年表日本博物学史』, 八坂書房
- 大庭 脩 (1980), 江戸時代の日中秘話, 東方書店
- 大森 実 (1976), 江戸時代におけるオランダからの輸入物品目録稿, 法政大学教養部紀要, 24号
- 小西正泰 (1993), 虫の博物誌, 朝日選書
- 小西正泰 (1994), 細川重賢 ⇨ [彩色] 江戸博物学集成, 平凡社
- 斎藤阿具 (1922), 徳川吉宗の洋馬輸入と和蘭馬術師の渡来, 史学雑誌, 33巻12号
- 斎藤阿具 (1936), 徳川吉宗と西洋文化, 史学雑誌, 47巻11号
- 白井光太郎 (1934), [改訂増補] 日本博物学年表, 大岡山書店
- 鈴木惟司 (2002~04), 覚え書き: 江戸時代初期小笠原で日本人船乗りたちが出会った鳥, 東京都立大学小笠原研究年報, 25~27号
- 宗田 一 (1992), 巢鴨御薬園預の渋江長伯, 医薬ジャーナル, 28巻3号
- 宗田 一 (1994), バサル獣の渡来, 医薬ジャーナル, 30巻3号
- 田代和生 (1999), 朝鮮薬材調査の研究, 慶應義塾大学出版会
- 長岡由美子・田中純子 (1994), 堀田正敦編『禽譜』について, MUSEUM, 521号・524号
- 成澤勝嗣 (1993A), 江戸渡来珍鳥ばなし, 月刊文化財, 352号
- 成澤勝嗣 (1993B), 長崎派絵画の写実と吉祥, 『花と鳥たちのパラダイス』, 神戸市立博物館
- 成澤勝嗣 (1998), 怪鳥カズワル江戸を歩く, 神戸市立博物館研究紀要, 14号
- 松田 清 (1987), 駝鳥考, 日蘭学会通信, 1987年1号
- 山下幸子 (1972), 享保の象行列, 地域史研究, 2巻2号

謝辞

本年表の作成にあたって, フウチョウなどの図を内田康夫駿河台大学教授に同定していただきました。心から御礼を申しあげます。

初出索引：片仮名の品名は現和名または漢名の読み、平仮名は原記載名、数字は西暦年である。インコ類・ジャコウネコ類・ハト類については、個々の和名のほか、類名の個所にも重出してある。

アオスジヒインコ 1820
 アカクサインコ 1814
 アカヒゲ赤髭 1680
 アカメカラスモドキ 1830
 アヒル 1501 →タチアヒル
 インコ音呼 1501, 注3
 アオスジヒインコ 1820
 アカクサインコ 1814
 オオキボウシインコ 1826
 オオハナインコ 1813
 オオハナインコモドキ 1834
 オトメズグロインコ 1813
 キボウシインコ 1817
 キムネゴシキセイガインコ 1837
 コムラサキインコ 1827
 サトウチョウ砂糖鳥 1639
 シュバシサトウチョウ朱嘴砂糖鳥 1836
 ショウジョウインコ 1831
 ズグロインコ 1831
 ズグロゴシキセイガイインコ 1766
 ダルマインコ 1676
 ヒインコ緋音呼 1813
 ヤクシャインコ 1818
 ヨウム洋鷓 1832

ルイチガイショウジョウインコ類違狸々音呼 1813
 ルイチガイヒインコ 1831
 ウコツケイ鳥骨鶏 1697
 ウシウマ牛馬 1598
 うみおしょう海和尚 1780
 オウム 647
 オオキボウシインコ 1826
 オオバタン(オウム類) 1831
 オオハナインコ 1813
 オオハナインコモドキ 1834
 オオフウチョウ 1697
 オオルリチョウ 1830
 オガサワラオオコウモリ 1675
 オガサワラハシブトゴイ 1675
 オガサワラマシコ 1675
 オトメズグロインコ 1813
 オナガキジ 1732
 オナガバト 1831
 オニカッコウ 1679
 オランウータン 1792
 オランダシシガシラ 1800
 かあぶすかなありや 1788, 注17
 かあぶす鳥 1831
 かいまん 1781 →ワニ
 カササギ 598
 カササギサイチョウ 1787
 ガチョウ 820
 カナリア 1709
 ガビチョウ画眉鳥 1708
 からくん→シチメンチョウ
 カラスバト 1802
 カラムクドリ 1795

カンザシフウチョウ 注16
 カンムリツクシガモ 1724
 カンムリバト 1734
 カンムリヒバリ 1831
 キボウシインコ 1817
 キムネゴシキセイガインコ 黄胸五色青海音呼 1837
 キュウカンチョウ 1612
 キョン(シカ類) 1833
 キンカチョウ錦華鳥 1835
 キンギョ 1502
 キンケイ錦鶏 1550
 キンバト金鳩・錦鳩 1717
 キンバラ金腹 1697
 ギンバラ銀腹 1787
 ギンムクドリ 1816
 クジャク 598, 注1
 クジャクバト 1711
 クビワオオコウモリ 1642
 クビワムクドリ 1763
 クリチャヒワ 1831
 クロウタドリ黒歌鳥 1839
 クロヒヨドリ 1538, 注4
 コウテンシ告天子 1709
 コウバイチョウ黄梅鳥 1805
 コウヨウジャク紅葉雀 1770
 コウライウグイス 1697
 コウライキジ 1596
 コウラウン紅羅雲 1789
 コシジロヒヨドリ 1831
 コシジロミツスイ 1819
 コジャコウネコ 1794
 コジュケイ小綬鷄 1727
 コバタン(オウム類) 1814
 コフウチョウ 1792
 コムラサキインコ 1827

コモンシャコ小紋鷓鴣 1767	しろくま 1799	ネコ 889
サイチョウ犀鳥 1734	ズアカアオバト 1802	ハイイロコクジャク 1736
サカゲ反毛(鶏) 1709	スイギユウ 671	ハイイロミカドバト 1799
サケイ 1786	ズグロインコ頭黒音呼 1831	ハクビシン白鼻心 1833
サソリ蠍 1758	ズグロゴシキセイガイインコ 頭黒五色青海音呼 1766	ばざる獣 1801
サトウチョウ砂糖鳥 1639	ズグロチャキンチョウ 1805	ハチドリ 1861
サラワクスンダリス 1800	スローロリス(猿) 1778	ハッカチョウ八哥鳥 732
サンゴチョウ珊瑚鳥 1817	セイケイ青鶏 1737	ハッカ白鷗 1454
サンジャク山鶺 1697	セイコウチョウ青紅鳥 1788	ハト
シキチョウ四喜鳥 1788	セイラン青鸞 1672	オナガバト 1831
シチセイギョ七星魚 1726	セマルハコガメ 1826	カラスバト 1802
シチメンチョウ七面鳥 1639	センザンコウ穿山甲 1765	カンムリバト 1734
シマキンバラ 1773	ゾウ 1408	キンバト金鳩・錦鳩 1717
シマハッカ 1742	ソウシチョウ相思鳥 1709	クジャクバト 1711
シマヒヨドリ嶋鶺 1538	ソデグロムクドリ 1831	じゃがたらぼと 1734
じゃがたらぼと 1734	タイカンチョウ大官鳥 1817	しゃくはちぼと 1802
しゃくはちぼと尺八鳩 1802	タイハクオウム 1831	しゃむろぼと暹羅鳩 1711
シャコ鷓鴣 1697	タイマイ(海亀) 1740	シラコバト白子鳩 1773
ジャコウネコ麝香猫 1226	タイワンドジョウ 1726	ズアカアオバト 1802
コジャコウネコ 1794	タチアヒル 1788	チョウショウバト 1666
ジャワジャコウネコ 1814	ダチョウ 1658	ナンキンバト 1697
マレージャコウネコ 1813	ダルマインコ 1676	ハイイロミカドバト 1799
ジャコウネズミ麝香鼠 1656	ダルマエナガ 1852	ハンキユウ斑鳩 1715
しゃむろぼと暹羅鳩 1711	ダンドク壇特 1717	ベニジュズカケバト 1730
シャモ軍鶏 1697	チクケイ竹鶏 1708	ベニバト 1831
ジャワジャコウネコ 1814	チャボ矮鶏 1697	べんがらぼと弁柄鳩 1730
ジャワマメジカ 1833	チョウショウバト 1666	ほんごくぼと 1734
ジャワヤマアラシ 1787	チョウセンメジロ 1766	レンジャクバト 1831
ジュウシマツ十姉妹 1717	チン狆 824	バリケン 1734
シュバシサトウチョウ朱嘴 砂糖鳥 1836	ツシマヤマネコ 1826	ハリネズミ 1735
ショウジョウインコ 1831	トウマル唐丸 1697	ハンキユウ斑鳩 1715
シラコバト白子鳩 1773	トコジラミ床虱 1595	ぴいちい 1734
シルバールトン(猿) 1807	トラ 1575	ぴいにす 1770
シロカザリフウチョウ 1806	ナンキンバト 1697	ヒインコ緋音呼 1813
シロガシラ白頭翁 1767	ナンキンムシ 1595	ヒクイドリ火食鳥 1631
		ヒゲガラ髭雀 1831

ヒツジ 599	ライオン 1865
ヒトコブラクダ 1821	ラクダ 599, 注2
ヒメウズラ 1813	ヒトコブラクダ 1821
ヒメコウテンシ 1831	フタコブラクダ 1803
ヒョウ 1595	ラバ騾馬 679
ヒヨクドリ比翼鳥 1697	ランチュウ 1748
フウチョウ風鳥 1635, 注16	りきうがも 1860 →カンムリ
ブタ 1501	ツクシガモ
フタコブラクダ 1803	リス→サラワクスンダリス
ブンチョウ文鳥 1697	リュウキュウガモ 1831
ヘキチョウ碧鳥 1667	リュウキン琉金 1780
ベニジュケイ紅綬鶏 1826	ルイチガイシヨウジョウイン
ベニジュズカケバト 1730	コ類違狸々音呼 1813
ベニスズメ 1697	ルイチガイヒインコ 1831
ベニバト 1831	ルリカケス 1735
べんがらばと弁柄鳩 1730	レンジャクバト連雀鳩 1831
ペンギン 1735	ろいあーると 1778
ホロホロチョウ 1819	ロバ 599
ほんごくぼと本国鳩 1734	ワウワウテナガザル 1809
まるてんちい 1734	ワニ 1780
マレージャコウネコ 1813	
マンガース 1727	
ミナミヤイロチョウ 1820	
ムジチメドリ 1849	
むすくりあとかつとう 1727	
メグロ目黒 1675	
メンヨウ綿羊 1775	
モルモット 1843	
モンシロチョウ紋白蝶 1758	
ヤイロチョウ八色鳥 1691	
ヤエヤマコウモリ 1642	
ヤギ 820	
ヤクシャインコ 1818	
ヤツガシラ八頭 1653	
ヤマアラシ豪猪 1643	
ヨウム洋鵠 1832	